

石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

－ 大谷地区 定徳寺脇墓地の石造物調査 －

令和7(2025)年7月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

－ 大谷地区 定徳寺脇墓地の石造物調査 －



石見銀山遺跡大谷地区 定徳寺脇墓地内 阿弥陀三尊種字六字名号自然石板碑

序

島根県と大田市は、平成9年度から石見銀山遺跡について発掘調査や文献調査など総合的な調査を行ってきました。こうした調査成果は、平成19年度に、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の世界遺産登録として実を結びました。

そして、登録後もその歴史的な位置づけをより一層明らかにするため、調査を継続しているところです。石造物調査もこの総合調査の一環として当初から取り組んでおり、これまでに銀山500年の歴史の一端を明らかにしてきました。

本書は、令和6年度に実施した、石見銀山遺跡大谷地区に所在する定徳寺脇墓地における石造物調査の成果を報告するものです。

今回の調査の結果、定徳寺脇墓地の調査では、石見銀山から温泉津・仁摩方面への出入口となる坂根口・畑口近くに16世紀中頃から19世紀前半にかけて造営された有力な墓群であることが確認されました。特に、弘治3年（1557）の紀年銘をもつ板碑は石見銀山遺跡内の石造物としては最古の紀年銘をもつものであり、開発初期における銀山内の信仰形態を物語る貴重な発見といえます。

これらの調査成果は石見銀山とその周辺地域における歴史や信仰のあり方を如実に物語るもので、今後の調査研究の基礎資料となるものです。

最後に、この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、本書を今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

令和7年7月

島根県教育委員会

教育長 野 津 建 二

例 言

1. 本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として、令和6年度に実施した石造物悉皆調査の報告書である。
2. 調査した場所は以下のとおりである。
定徳寺脇墓地 大田市大森町ホ111、ホ300
3. 調査は次の組織で実施した。(敬称略)
石見銀山遺跡学術戦略会議
粟野 隆(東京農業大学地域環境科学部教授)
會下和宏(島根大学総合博物館教授)
岡 美穂子(東京大学史料編纂所准教授)
黒田乃生(筑波大学芸術系教授)
仲野義文(石見銀山資料館館長)
下田一太(筑波大学芸術系教授)
下間久美子(國學院大學観光まちづくり学部教授)
福本理恵(株式会社SPACE CEO・東京大学未来ビジョン研究センター客員研究員)

事務局(島根県教育委員会文化財課)

令和6年度

村上かおる(文化財課長)、藤原秀樹(世界遺産室長)、岩橋孝典(同課長補佐)、田原淳史(同課長補佐)、倉恒康一(同専門研究員)、渡部麻生(同専門研究員)、小村雪(同主任主事)、清水佳那子(同会計年度任用職員)

令和7年度

池淵俊一(文化財課長)、藤原秀樹(世界遺産室長)、岩橋孝典(同課長補佐)、田原淳史(同課長補佐)、渡部麻生(同専門研究員)、田村亨(同主任研究員)、真木大空(同主任)、小村雪(同主任主事)、清水佳那子(同会計年度任用職員)

石造物調査指導者

佐藤亜聖(滋賀県立大学人間文化学部教授)

西尾克己(松江市歴史まちづくり部松江城調査研究室松江市史松江城部会長)

調査参加者

(島根県教育委員会) 岩橋孝典

(大田市教育委員会) 中田健一(石見銀山課課長補佐)、山手貴生(同主任)

新川 隆(同会計年度任用職員)、尾村 勝(同会計年度任用職員)

4. 調査に際して、下記の方々から御協力、御助言をいただいた。記して謝意を表したい。(敬称略)
内田貞義
5. 実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター(大田市大森町E1597-3)において保管している。

6. 本書の執筆・編集は岩橋が行った。

凡 例

- ・石造物一覧表には、定徳寺脇墓地に所在する石造物を掲載した。
- ・各石造物の規模は基本的に高さ及び最大幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を（ ）内に記載した。
- ・銘文は戒名が書かれている面を正面とし、向かって右側を右面、左側を左面、反対側を背面としている。複数の面に銘を持つ場合は、正面) … 右面) … と記載している。
- ・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は[]で示した。また推定できる文字は□の後に(仮)と表示した。
- ・実測図を掲載していない石造物についても一覧表に掲載し、今後の研究の資料とした。
- ・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。
- ・定徳寺脇墓地の石造物の型式分類は、鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5 分布調査と墓石調査の成果』および、鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2024『石見銀山遺跡石造物調査報告書21—分布調査と墓石調査の成果(2005-2022)一』による。

本文目次

第1章 石造物調査の目的・対象・経緯	
第1節 調査の目的	1
第2節 調査の対象	1
第3節 調査の経緯	1
第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史	
第1節 石見銀山の位置と地質学的背景	5
第2節 石見銀山の歴史的背景	5
第3節 大谷地区定徳寺脇墓地の位置と歴史的環境	8
第3章 大谷地区定徳寺脇墓地の石造物調査	
第1節 調査の経緯と調査地点の名称について	11
第2節 調査の経過と方法	11
第3節 石造物の概要	14
第4節 定徳寺脇墓地の特質	25
第5節 小結	37

挿図目次

第1図 石見銀山遺跡全体図 (1/50,000)	6
第2図 石見銀山遺跡銀山地区全体図 (1/25,000)	7
第3図 定徳寺脇墓地周辺地形図 (1/1,000)	12
第4図 定徳寺脇墓地の石造物分布図 (1/50)	15
第5図 定徳寺脇墓地 石造物実測図(1) (1/10)	19
第6図 定徳寺脇墓地 石造物実測図(2) (1/10)	20
第7図 定徳寺脇墓地 石造物実測図(3) (1/10)	21
第8図 定徳寺脇墓地 石造物実測図(4) (1/10)	22
第9図 定徳寺脇墓地 石造物実測図(5) (1/10)	23
第10図 定徳寺脇墓地 石造物実測図(6) (1/10)	24
第11図 定徳寺脇墓地における墓石紀年銘の出現頻度	25
第12図 定徳寺脇墓地の石造物種別	25
第13図 定徳寺脇墓地の石造物分布図(2)	27
第14図 定徳寺脇墓地における18～19世紀代の系譜関係	28
第15図 島根県内の板碑および類似する石造物分布図	31
第16図 山陰地域における板碑造立の傾向と地域性	32
第17図 大田市周辺の板碑および関係する石造物	33
第18図 大田市内の光背型石造物および関連する石造物資料	34
第19図 石見銀山型石廟1類の比較	36

表 目 次

第1表	山陰地域の木製板碑一覧	41
第2表	島根県の石製板碑一覧	41
第3表	島根県の光背型板碑・墓標一覧	42
第4表	大谷地区定徳寺脇墓地の石造物	46

写真図版目次

巻頭写真	石見銀山遺跡大谷地区 定徳寺脇墓地内 阿弥陀三尊種字六字名号自然石板碑
写真図版表紙	
写真1	阿弥陀三尊種字六字名号自然石板碑
写真2	阿弥陀三尊種字六字名号自然石板碑（部分）
写真3	定徳寺脇墓地の石造物1
写真4	定徳寺脇墓地の石造物2

第1章 石造物調査の目的・対象・経緯

第1節 調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世初頭）、さらには近代へと長期間にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開山から閉山に至るまでに、繁栄期・停滞期・近代復興期のあったことが明らかになってきている。この歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな角度から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の操業に関わった人々の信仰や葬送儀礼の実態解明を進めるとともに、社会経済の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

第2節 調査の対象

一概に石造物といっても①墓碑、石塔、石仏、寺社に奉納された燈籠・鳥居・手水鉢などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことであるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の4つの区分のうち、墓制関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱山労働者・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）をより直接的に反映するものと考えた。また、寺社へ奉納された石造物は石見銀山に居住する人々の具体的な信仰の在り方を示す資料と考えられることから、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた

目的に迫ることとしている。

第3節 調査の経緯

石造物調査（墓石）は、鳥根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のため、昭和60年度に徳善寺跡などで、天正から慶長年間の紀年銘石塔を中心に一部の確認調査を実施したことが発端となっている。

平成9・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ、各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を押えるため、紀年銘を持つ墓石の調査を重点的に進められた。墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は採掘や生活をしてきた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査計画の策定と実践の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の3つの調査を行うこととなった。

- ①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要箇所について判断材料を得るための分布調査。
- ②特徴的な墓地の構造や変遷を把握するために行う悉皆調査。
- ③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら3つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満

たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期といわれている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする悉皆調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵琉寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆の調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22～23年度は、平成9・10年度に分布調査を行っていた石銀地区の悉皆調査を実施した。石銀地区は石見銀山に於ける初期鉱山業の中心の一角であり、墓Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの悉皆調査を通して、奉行・代官墓にも匹敵する規模の石塔群が樹立されていることが判明した。

平成24年度は、平成24～25年度の落石防護柵設置予定地に本経寺墓地（大谷地区）があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、こちらの悉皆調査と試掘調査を実施した。

平成25年度は、栃畑谷地区の市道大森三久須線の治山事業対象地である字甚光院周辺に石造物がまとまって存在することが確認されたため緊急的に悉皆調査を実施した。

また、大谷地区の高橋家裏の要害山南麓では、自然災害防止事業の対象地内に石塔が数基確認されたため調査を行った。

落石対策事業等の緊急調査以外には、清水谷地

区本法寺跡にある銀山町役人・門脇家墓所と下河原天満宮跡で調査を実施している。

平成26年度は、石銀地区の墓地・石造物の全容を明らかにするため、同地区で未調査であった、墓Ⅰ、墓Ⅱ東、墓Ⅲ東、墓Ⅳ、墓Ⅴの悉皆調査を行った。

また、栃畑谷地区字甚光院についても、平成25年度調査地に隣接しながらも未調査であった南東側斜面と南側平坦面で悉皆調査を行い、墓域全体での変遷を把握することができた。

平成27年度からは、大田市教育委員会によって発掘調査が進められている昆布山谷地区を調査対象とし、石造物の様相や墓地の年代を明らかにするとともに、同地区の変遷について検討する資料を得ることとした。当年度は、同地区で古い石造物が密集する妙本寺上墓地E地点の悉皆調査を行ったほか、妙本寺上墓地G地点や虎岸寺跡墓地において銘文の調査を実施した。

平成28年度は、前年度に引き続いて昆布山谷地区の妙本寺上墓地を調査対象とし、群中でも最も古いと見られていたA地点について悉皆調査を実施した。

平成29年度も引き続き妙本寺上墓地のB、C、D、F、H地点の調査を行い、3年間にわたる妙本寺上墓地の調査が完了した。

平成30年度は妙本寺上墓地の北西側に位置する龍源寺間歩上墓地の調査を実施した。約250基以上の石造物が確認されたため、令和元年度も継続して調査を実施した。

令和2年度～5年度にかけて、これまでの四半世紀におよぶ調査成果をまとめる総括報告書を作成した。成果のひとつに石造物の編年がある。本遺跡では1570年代から石塔の造立が始まっているが、周辺地域では、さらに古い14～16世紀前半にかけての在地産石塔が確認されている。本遺跡の石塔を在地産石塔の変遷のなかに位置づけるため金皇寺（仁摩町大國）と温泉津町湯里の石造物について調査を実施した。

また、令和4年度には豊栄神社の石造物調査を

実施した。これは保存修理工事のため境内地堆積土の漕き取りを実施したところ、昭和18年水害で倒壊埋没したものが再出現したものである。平成13年度調査成果と併せて、平成2年～3年にかけて幕長戦争に勝利した長州藩駐屯軍による石造物寄進状況が明らかになった。

令和5・6年度は、これまであまり注目されていなかった坂根口・畑口番所跡に隣接する大谷地区・徳善寺上墓地、定徳寺脇墓地について悉皆調査を実施した。徳善寺上墓地では、分布調査で報告されていた周知の概数の3倍以上にのぼる石造物が確認され、17世紀初頭を中心とする一大墓群であり、かつ相当に有力な鑑山師連の墓域である可能性が明らかとなった。

浄土宗定徳寺脇の墓域の悉皆調査では、通常の五輪塔、宝篋印塔、墓標などの他に、六字名号自然石版碑、石廟、石燈籠、無縫塔などの多様な石造物がみられた。この墓域は定徳寺跡に隣接するものの、19世紀代の墓石は浄土真宗に特有な釈戒名である。また、定徳寺は、天正年間開基であり、宝永7(1710)年に吾郷村(現美郷町吾郷)に移転している。当該墓域では弘治3(1557)年から弘化2(1845)年にかけて石造物が造立されており、定徳寺の存在期間と合致していないことから定徳寺の付属墓地とは言えないが、調査研究史上の経緯から「定徳寺脇墓地」として報告する。

【参考文献】

- 1 鳥根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』
- 2 鳥根県教育委員会・鳥根県文化財愛護協会『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』
- 3 鳥根県教育委員会他1999『城跡調査・石造物調査・間歩調査編』『石見銀山』第3分冊
- 4 鳥根県教育委員会他1999『民俗調査・港湾調査・街道調査編』『石見銀山』第6分冊
- 5 温泉津町教育委員会1999『1999 温泉津』
- 6 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1—妙正寺—』
- 7 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2—龍昌寺跡—』

- 8 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3—安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外—』
- 9 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4—長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地(河島家・宗洞家)—』
- 10 鳥根県教育委員会2004『石見銀山街道—瀬戸浦道・温泉津沖泊道調査報告書—』
- 11 鳥根県教育委員会2005『石見銀山街道—瀬戸浦・沖泊集落調査報告書—』
- 12 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5—分布調査と墓石調査の成果—』
- 13 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6—温泉津地区恵光寺墓所—』
- 14 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書7—温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(1)—』
- 15 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書8—温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(2)—』
- 16 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書9—西念寺墓地(3)・安原備中墓・大光寺墓地—』
- 17 大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区 保存対策調査報告書(補訂版)』
- 18 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10—金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物—』
- 19 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11—極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区—』
- 20 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12—仙・山石銀地区墓田の調査—』
- 21 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13—本経寺墓地の調査—』
- 22 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14—柳畑谷地区字基光院の石造物調査—』
- 23 鳥根県教育委員会2014『石見銀山—大谷地区 本経寺墓地発掘調査報告書—【山吹城南西麓の郭遺構の調査】』
- 24 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡石造物調査報告書15—石銀地区墓Ⅰ・墓Ⅱ東・墓Ⅲ東・墓Ⅳ・墓Ⅴの石造物調査— 柳畑谷地区字基光院の石造物調査—』
- 25 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2016『石見銀山遺跡石造物調査報告書16—昆布山谷地区妙本寺上墓地E地点・G地点 虎岸寺跡の石造物調査—』
- 26 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2017『石見銀山遺跡石造物調査報告書17—昆布山谷地区妙本寺上墓地A地点の石造物調査—』
- 27 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2019『石見銀山遺跡石造物調査報告書18—昆布山谷地区妙本寺上墓地B・C・D・F・H地点の石造物調査—』

- 28 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2020『石見銀山遺跡石造物調査報告書19—枋畑谷地区龍源寺岡上墓・妙像寺墓地の石造物調査—』
- 29 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2021『石見銀山遺跡石造物調査報告書20—保国山金皇寺（仁摩町大園）—』
- 30 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2024『石見銀山遺跡石造物調査報告書21—分布調査と墓石調査の成果（2005-2022）—』
- 31 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2024『石見銀山遺跡石造物調査報告書22—下河原地区 豊栄神社・大谷地区 徳壽寺上墓地—』
- 32 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 2002『石見銀山遺跡調査ノート』1
- 33 鳥谷芳雄 2008『温泉津金剛院の宝篋印塔基礎について』『石見銀山遺跡調査ノート7』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 34 大田市教育委員会 2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区 保存対策調査報告書（補訂版）』
- 35 間野大丞 2010『長州藩勇方隊が寄進した石製用水』『季刊文化財』一二三 鳥根県文化財愛護協会
- 36 守岡正司2011『石見銀山石造物調査の概要』『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 37 西尾克己・東山信治2016『大田市内の中世石造物』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究6』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 38 鳥根県教育委員会2019『松林寺遺跡』『垂水遺跡・松林寺遺跡・庵寺石塔群』鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 39 伊藤創・西尾克己 2020『江の川流域の福光石系石塔の様相』『池上哲先生古稀記念論文集 芙蓉峰の考古学Ⅱ』株式会社六書房
- 40 伊藤創・西尾克己・持田直人 2021『邑智郡美郷町・下波多野家墓地における石塔・墓標の変遷』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』13 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 41 西尾克己・幡中光輔・持田直人 2022『邑智郡美郷町元山根家墓地の特質と墓標の変遷』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』12 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 42 間野大丞・伊藤徳広 2022『テーマ別調査研究「港町温泉津の景観と変遷」における石造物調査—中間報告—』『保国山金皇寺石造物調査報告（補遺）』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』12 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 43 大田市教育委員会 2023『豊栄神社修理工事報告書』
- 44 間野大丞 2023『温泉津町湯里の中世石造物』『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書5 港町温泉津の景観と変遷』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 45 間野大丞 2023『中世石造物からみた温泉津』『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書5 港町温泉津の景観と変遷』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 46 間野大丞 2023『石見銀山遺跡周辺の宝篋印塔—搬入品と在地品の調査から—』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』13 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 47 岩橋孝典 2023『石見銀山遺跡石銀地区に所在する篆刻体文字を刻する墓石について—16世紀末〜17世紀初頭における知識層の存在—』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』13 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 48 岩橋孝典 2024『鳥根県最古の「皇紀元」紀年銘について—慶応三年建立の豊栄神社小鳥居—』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』14 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会

第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史

第1節 石見銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180km余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隠岐」の3国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置し、現在の行政区分では大田市に所在する。

石見地域では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており、大規模な沖積平野は見られない。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前期更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山々は、「溶岩円頂丘」に分類され、粘性が高いデイサイトで山体が形成されている。

仙ノ山の山体は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床型の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という2つの鉱床がある。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物やビスマスをほとんど含まない。

また、永久鉱床では黄銅鉱、黄鉄鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀、ビスマスなどが含まれる。

第2節 石見銀山の歴史的背景

平安時代末期に、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な荘園が成立し、その後、中世には石見銀山周辺に多くの荘園、国衙領が成立する。

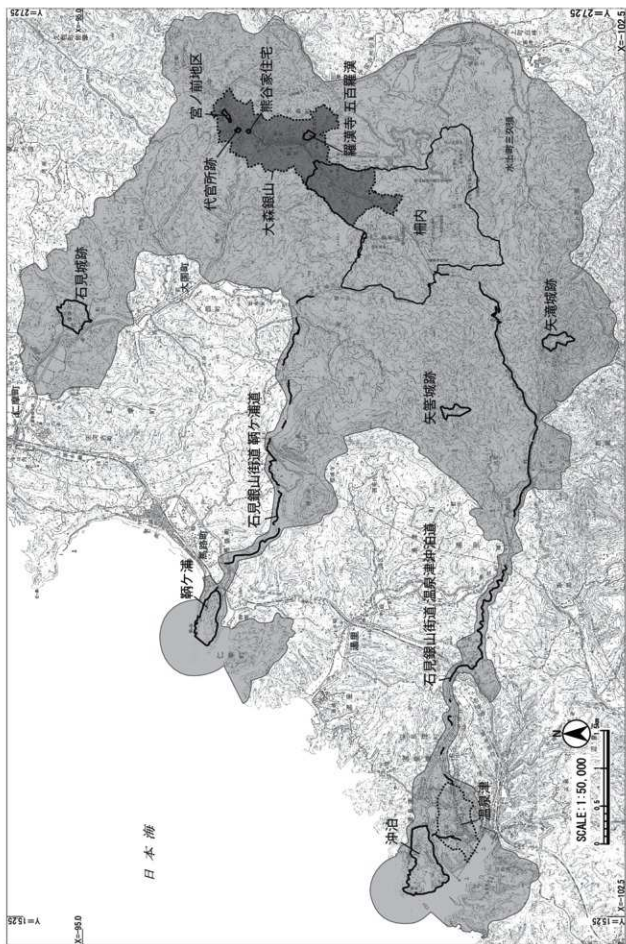
南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見国守護を兼任するが、応永の乱（1399）で敗れ、石見守護職を没収される。しかし、義弘の弟・盛見は、応永8（1401）年には大内氏の家督を実力で奪取し、石見国のうち瀬摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代に

も引き継がれた。永正年間（1504-1521）に至ると大内義興が石見一門の守護権を奪回した。

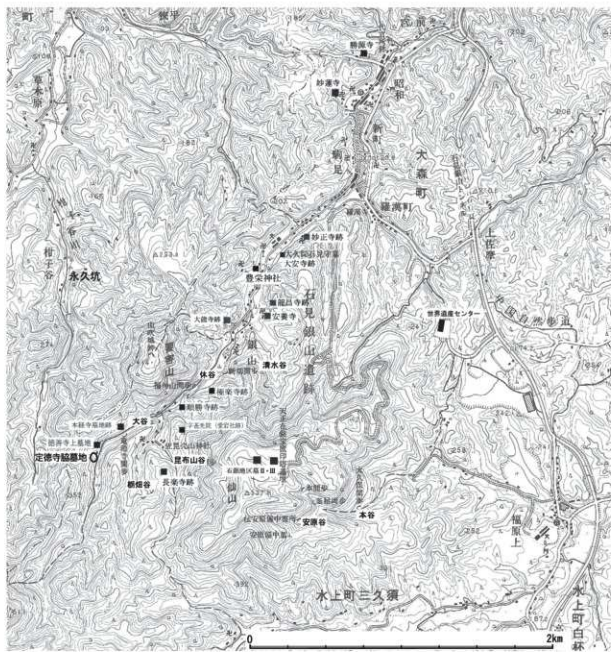
戦国期の大永7年（1527）に石見銀山が発見される（大森町清水寺の寛永2（1625）年の本堂再建棟札）。『銀山旧記』には発見者が博多の有力商人神屋寿禎と記されている。大内氏は博多の有力商人と結び、中国との勘合貿易を独占的に行っており、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われるようになった。天文2（1533）年には鉛合せ吹きが伝えられ、現地で製錬が行われるようになり、石見銀山の産銀量は急激に増大した。大内氏や尼子氏、毛利氏により銀山領有をめぐる争奪戦が行われ、それに伴い多数の城館跡が銀山周辺や街道沿い、港周辺に普請されている。1560年代前半には毛利氏が尼子氏との銀山争奪戦に勝利し、石見銀山の支配権を確立した。

江戸期に入ると、石見銀山がある瀬摩郡・安濃郡は石見銀山附御料に編入され、幕府直轄領となった。江戸初期は、初代奉行、大久保長安の経営により銀山は繁栄期を迎え、この頃の年間産銀量は約10,000貫（約37.5 t）と推定されている。寛永期を過ぎると、良鉱が乏しくなったことや、坑道が深くなり湧水処理に多大な経費を要するようになったことにより、採算に合わない間歩は採掘が停止された。延宝元（1693）年以降の記録によると、産銀量は年間約300貫（約1 t）前後で推移し、幕末頃には年間約50貫（0.187 t）を下回る状況であった。

明治維新後は、しばらく地元有志による小規模な経営が続けられたが、明治19（1887）年に大阪に基盤を置く長州系企業の藤田組が経営に乗り出し、近代的主要産品は銅で、明治後期から大正初期には第1次世界大戦期の軍需景気にも乗り隆盛をみた。しかし、第1次大戦後の銅価格低下を背景として大正12（1923）年に石見銀山は休山した。



第1図 石見銀山遺跡全体図 (S=1/50,000)



第2図 石見銀山遺跡銀山地区全体図 (S=1/25,000)

第3節 大谷地区定徳寺脇墓地の位置と歴史的環境

定徳寺脇墓地区は、大田市大森町ホ111に所在する。現在、定徳寺跡とされる畑口に向かう山道沿いの平坦地（定徳寺跡か）からみて西側に隣接する緩斜面に所在することから、「定徳寺脇墓地」と呼称している。この山塊は山吹城跡のある要害山から南西に延びる丘陵の南東側斜面にあたる。

銀山川沿いの市道銀山線部分では、標高223m前後であり、丘陵尾根部は標高340m前後である。墓群の立地する平坦面は標高228m前後であることから、市道付近との比高差は5m程度である。

石見銀山遺跡の総合調査が平成9（1997）年から開始され、定徳寺脇墓地周辺の分布調査は2001年4月に実施されている。その成果は2005年刊行の『石見銀山遺跡石造物調査報告書5 分布調査と墓石調査の成果』に掲載されている（鳥根県教委・大田市教委2005）。

ここでの紹介は、名称が「上徳寺墓地」であり、墓地の構成内容が一石宝篋印塔2基、一石五輪塔1基、角塔1基の合計4基というものであった。

名称についての詳細は、第3章で詳述するが、本報告では「定徳寺」跡と推定される平坦面に隣接するという地勢的な観点から「定徳寺脇墓地」として報告する。

なお、畑口に至る山道の北側は国指定史跡の範囲内であるが、山道の南側に所在する定徳寺脇墓地は指定地外となる。

定徳寺脇墓地が立地する大谷地区の南西部は柵之内と外部をつなぐ「坂根口番所」、「畑口番所」に近く、温泉津方面や柑子谷方面の街道を通行する人々が頻繁に往来する地域として知られる。

上記の番所付近に立地する寺院として、「松林山 徳善寺」と「松林山 定徳寺」がある。「徳善寺」は、慶長17（1612）年頃に釈教順が石見銀山大谷地区に開基した浄土真宗寺院とされる。ただし、当初は大谷の中で「坂根畳屋向」に所在し、そこから「番所の上ミ」に移転し、今の「番

所の下」に移転したのは18世紀末～19世紀初頭と推測される。

幕末期には檀家も減少したため、明治6年に島根県令に提出した移転願書が残されている。その後、廻摩郡大谷を経て、明治44年には那賀郡旭町（現浜田市）に移転し、現存している（三瓶古文書を読もう会1995）。

現在、徳善寺跡とされる付近をみると浄土真宗の墓域は、本書報告の定徳寺脇墓地内に所在する飯田屋の代々墓地があるが、慶長期に遡るまともった墓群は知られていない。このことは徳善寺が大谷の奥部から数回移転したという伝承と調和的である。

一方、定徳寺については、寺院の創建や宝永年間の吾郷村（現美郷町）移転とその檀越について先行研究がある（西尾・持田2024、三瓶古文書を読もう会1995）。

それによると、開基は天正年間であり、法警慶公による開山とされる。二世超警が住職であった天正17（1589）年に後陽成天皇から「定徳」の宸翰を賜っている。文禄4（1595）年には本山知恩院の輪番職に任じられて紫衣を賜っている。このように銀山大盛期には寺勢があったが、銀山の産出量が減少した17世紀後半には檀家も減少し荒廃していたという。

宝永7（1710）年、六世了空の時、江ノ川に銀ほど近い銀山科吾郷村の有力者・山根八左衛門種政により、衰退していた定徳寺は吾郷村に移転し現在も同所に伽藍を構えている（西尾・持田2024）。

吾郷村に移転後の定徳寺については、西尾・持田論文に詳述されている。定徳寺が石見銀山大谷に所在していたのは、16世紀後半から18世紀初頭までであり、寺勢があった時期は17世紀中頃までとみてよいであろう。

「徳善寺上墓地」に所在する墓塔群では、顕著に「警」号戒名がみられることや、徳善寺の現在地への移転年代が18世紀末頃に下ることからみて、本来は「定徳寺墓地」として成立したことが

考えられる（鳥根県教委・大田市教委2024）。

天保4年に記された「石陽銀山物語」（上野家文書）には、徳善寺上墓地の大型宝篋印塔を納める岩窟について以下のように記載がある。

又徳善寺後、上徳寺右脇山の根に
石堂あり、初メハ行来の人を馬より
おろしぬ、故に今ハ後にむきて有
といへり、これも又何人の塚かしらす
元今の徳善寺屋敷は上徳寺分也

約200年前に造立された銀山町の有力者の巨大墓塔も、天保期には誰の墓かわからなくなっていることが知られるのである。

参考文献

- 三瓶古文書を読もう会 1995『石見銀山百か寺』
鳥根県教育委員会・鳥根県文化財愛護協会 1987『紀年銘のある石塔』『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』
鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5 分布調査と墓石調査の成果』
鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2024『石見銀山遺跡石造物調査報告書22 下河原地区 豊栄神社・大谷地区 徳善寺上墓地の石造物調査』
西尾克己・持田直人 2024『美郷町・松林山定徳寺についてー石見銀山百か寺の調査ー』『石見銀山遺跡の調査研究14』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会

第3章 大谷地区定徳寺脇墓地の調査

第1節 調査の経緯と調査地点の名称について

「定徳寺脇墓地」の名称は、令和6年度の現地悉皆調査の時点から暫定的に使用し、令和7年3月17日の調査指導会で協議したうえで、正式に使用している。当該墓地の名称については、特定寺院の付属墓地としての名称か、特定寺院との立地上の位置関係を示す呼称なのかで表記揺れが生じていた。これについて経緯を解説する。

平成13(2001)年4月には、当該墓地の分布調査が実施され4基の石塔の存在が把握された。その成果は、2005年に刊行された『石見銀山遺跡石造物調査報告書5』に記載され、当該墓地は「上徳寺墓地」として掲載されている。この時点では、定徳寺に付属する墓地として認識されていたことになる(島根県教委・大田市教委2005)。

令和6年度に、当該墓地の悉皆調査を実施するにあたり、事前に踏査したところ19世紀代の墓塔に記される法名には浄土真宗に特徴的な「釈」号が使用されていることが判明した。

浄土宗・定徳寺は、天正年間～宝永7(1710)年まで銀山大谷に所在している(西尾・持田2024)。一方、隣接して所在する浄土真宗・徳善寺は慶長17年から明治6年頃まで銀山大谷に立地するものの、大谷地内で移転を繰り返し、現在地への移転は18世紀末頃と考えられる(三瓶古文書を読む会1995)。

当該墓地での石造物の造立は、弘治3年(1557)年～弘化2年(1845)の間となるが、定徳寺・徳善寺の両寺の継続期間とは必ずしも合致しない。

しかし、これまでの研究史上長く用いられた呼称を俄かに変更することは混乱も予想されることから、定徳寺との地勢的な立地関係に基づき「定徳寺脇墓地」の呼称を用いることとした。これまでも日蓮宗・妙本寺の曹後山中に所在する浄土宗墓群について「妙本寺上墓地」、龍源寺間歩の上り山中にある浄土真宗と日蓮宗の混在する墓群に

ついて「龍源寺間歩上墓地」と呼称する前例もある。

大谷地区では、令和2年度～令和4年度にかけて発掘調査が行われ、銀鋼生産の実態が明らかとなりつつある(大田市教委2021～2023、2025)。しかし、当該地区での石造物調査は本経寺墓地、徳善寺上墓地で実施されたのみであり、墓域や造墓活動の詳細な状況は長く不鮮明であった。このことから大谷地区内ではまとまった造墓数が知られ、16世紀中頃～19世紀中頃に造営された定徳寺脇墓地についての実態解明が急がれた。

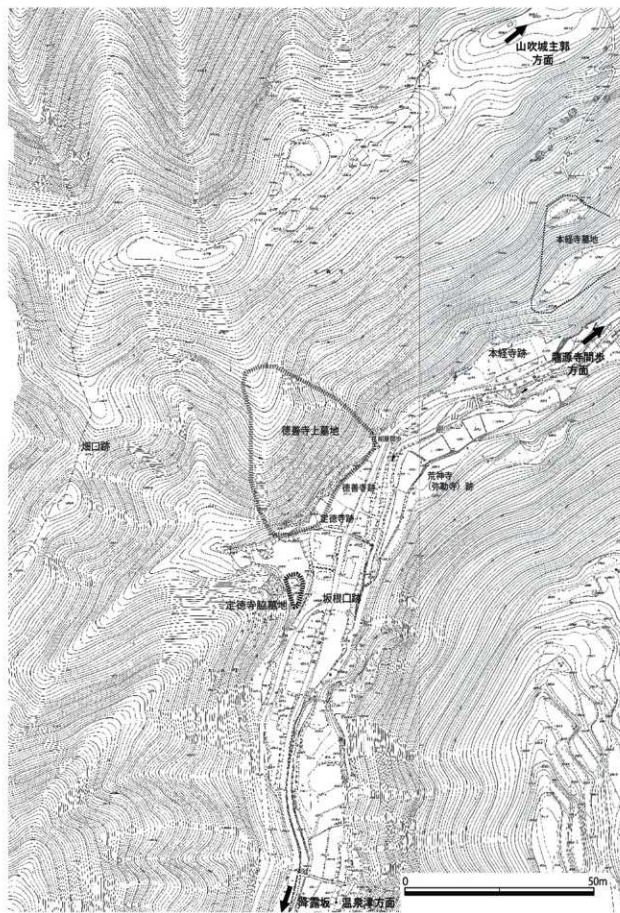
第2節 調査の経過と方法(第3図)

石造物悉皆調査では平成25年度～令和元年度にかけて佐毘売山神社周辺の字基光院、妙本寺上、龍源寺間歩上などの地域で調査を実施した。栃畑谷、昆布山谷、出土谷などは石見銀山内でも主要な銀鋼生産域であり、かつ山神である佐毘売山神社が所在し、信仰面でも中核といえる地域での石造物の様相や展開が明らかになったといえる。

一方、これに隣接する大谷地区では平成24年度に本経寺墓地(日蓮宗)の悉皆調査が実施されて以来石造物調査は行われていなかった(島根県教委・大田市教委2013)。しかし、令和2年度～令和4年度にかけて大谷地区の発掘調査が実施されるなど、石造物調査においても同地域の実態解明が急務となっていた。

その中で、平成13年度の分布調査によって16世紀末～17世紀前半の石塔群が所在していることが知られ、かつ坂根口番所跡にも隣接している徳善寺上墓地は優先的に調査すべき墓群として認識された。

徳善寺上墓地の調査成果としては、墓塔147基(組合せ宝篋印塔23基、一石宝篋印塔77基、一石五輪塔41基、無縫塔6基)と、墓標としては地藏6基、位牌型方形墓標1基が確認された。また、石廟は完存するものはないが、部材の検討から少なくとも11基の存在が確認された。



第3図 定德寺腦墓地周辺地形図 (S=1/1,000)

分布状況としては、山麓の岩窟は標高227m付近に二か所並列して所在している。共に幅4m、奥行き1.5mほどの規模をもち、両岩窟の間隔は2mほどである。岩盤を開削した平坦面上に、それぞれ2基一対の大型・小型宝篋印塔を並列設置していたと考えられる。

現状では天井の無いオープンな岩窟であるが、平坦面の前面には岩盤を加工した石階段が設けられ、岩盤を開削した柱穴も認められる。奥壁の最上部には屋根や庇などの構造物を設置する段状の切り込みが設けられ、さらに雨水を処理するための溝状の掘り込みが岩窟上面を圍繞する様子も確認される。

このような岩盤加工遺構は、石見銀山遺跡内の住居・工房などの建物背面の処置に通ずるものである。このことを鑑みれば、大型宝篋印塔を設置した岩窟には本来、屋根が掛けられた覆屋となっている可能性がある。街道（標高221m前後）に面して立地し、温泉津や柑子谷側から銀山への出入り口である坂根口番所・畑口番所にも近い立地環境から、霊廟や拝所的な施設として機能していたと推定される。

一方、山中の石造物群は、標高230～270mの急傾斜地に6群程度の狭長な平坦面開削ないし尾根上利用によって設置されている。

現在、徳善寺跡とされる市道銀山線に接する平坦地から墓群に至る葛折れの石段が認められ、これが本来の墓参道と考えられる。墓群は標高の低い方からA群（標高230～238m）、B群（240～246m）、C群（245～250m）、D群（255～265m）、E群（255～260m）、F群（尾根上で251～270m）に区分できるが、急斜面に転落した墓石石材も多くみられる。

A群には、「当寺開山」の銘を持つ基礎や石廟1類が存在する。B群では中規模の組合せ宝篋印塔や石廟、無縫塔が含まれる。C群では大型の組合せ宝篋印塔や無縫塔が存在する。D群は基数は少ないが、中規模の組合せ宝篋印塔や無縫塔が含まれる。

E群では、小型の石廟があるが、一石五輪塔、一石宝篋印塔が主体である。尾根上のF群では石廟がみられるが一石五輪塔、一石宝篋印塔が主体である。

この状況から僧侶墓である無縫塔を含むA～D群に優位性がみられ、中でも開山塔や石廟1類のあるA群と大型の組合せ宝篋印塔の存在するC群が徳善寺上墓地山中群の盟主的存在といえる。高所に所在するE・F群は一石五輪塔・一石宝篋印塔や小型石廟で構成されており、A～D群の造墓者よりも下位の造墓者が想定される。

この山腹斜面は、平均傾斜度40度に及ぶ急傾斜地である。佐見山神社周辺でもこのように急傾斜地への造墓は類例が少ない。

定徳寺の付属墓地として造墓が可能であった土地が限定されていたのか、あるいは急傾斜地に造墓することによる街道からの視認効果を期待した可能性が考えられる（島根県教委・大田市教委2024）。

このような徳善寺上墓地の調査成果を受け、同墓地群から畑口への登山道を挟んで対面に所在する定徳寺臨墓地の調査が期待された。

調査はおもに山麓緩斜面にある平坦面部分（標高228m前後）に所在する板碑、石廟、石塔、墓標等を対象とし、令和6年11月21日から12月27日まで、延べ6日を費やして断続的に実施した。

調査指導会は1回開催した。令和7年3月17日に、佐藤聖氏（滋賀県立大学）、西尾克己氏（テーマ研究客員研究員）から石造物の年代や性格、立地環境について調査指導を受けている。

悉皆調査の実施状況は以下のとおりである。
調査主体 島根県教育委員会、大田市教育委員会
調査参加者 岩橋孝典、新川隆、尾村勝
調査期間 令和6年11月21日～12月27日

調査の方法については、事前の踏査で確認したすべての墓塔や墓標について番号を付与し、種別、遺存状況、寸法、銘文、その他の特徴などを記入した調査一覧表を作成した（40点）。その中



定徳寺脇墓地の調査状況

から、有銘文、遺存状況の良さ、特殊な型式のものを優先図化することとして、急斜面に存在するなど立地環境が悪いものや、大半が土中に埋没している個体は図化を見送っている。その結果、実測図を作成したものは39点となった。実測図はすべて実物の1/5で実測している。

写真撮影は、立地環境が悪いものを除いて基本的に全点撮影を行った。

第3節 石造物の概要

(1) 石造物の分布 (第4図)

石造物の造立されている平坦面は標高228m付近に所在している。平坦面は幅(南北)7m、奥行き(東西)4mほどの規模であるが、底面は水平ではなく緩やかに谷側(西から東)に傾斜している。また、北側と南側で若干の段差があり北側が低くなっている。各平坦面の東端には低い石列により区画がなされている。

現状で、墓域への出入りは北側からとなっている。街道に面する東側には石段等の進入施設がみられない。

当該墓域の造墓活動は、平坦面南端に造立され、原位置を保つ自然石板碑(弘治3年(1557)が基点となっており、次いで天正20年(1592)銘の白色凝灰岩製一石五輪塔(14)がある。

17世紀初頭頃の組合せ宝篋印塔(3-8-18)、一石宝篋印塔(5、6、13)、一石五輪塔(4、12、20)は、全て倒壊しており原位置を保つも

のはないが板碑の北側に近接して連続的に設置されたものと考えられる。

さらにその北側に接して、無縫塔(11、22)、石廟(19、26)、笠付墓標(7、8、25、27～29)、石燈籠(23、24)など17世紀前半～18世紀初頭に造立された石造物が設置されている。無縫塔(22)、石燈籠(24)などは土圧により傾斜しているものの、元の位置から大きく動いていないものと考えられる。ここまでは平坦面南側に所在している。

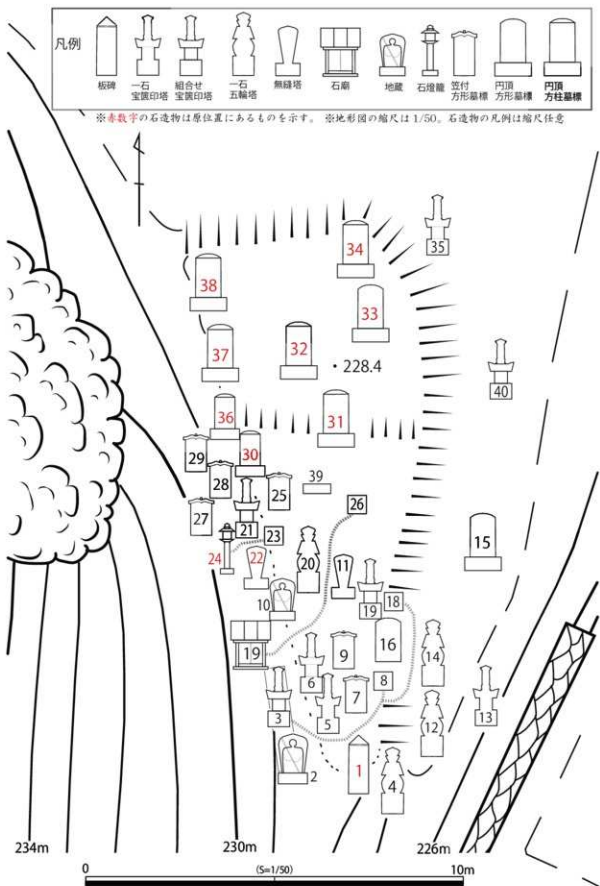
一段下がった北側平坦面には、円頂方形墓標2基、円頂方柱墓標8基で構成された18世紀中頃～19世紀中頃の墓域が展開する。南側が古い時期に造立された墓標で、北端には弘化2年(1845)に造立された円頂方柱墓標(39)が設置され、そこで墓の造立が停止されている。

墓群全体としては、16世紀中頃から19世紀中頃まで継続的に続く一族代々墓のようにもみえるが、16世紀後半や18世紀中頃～末には空白期がみられることから造営者の家系交替も考えられる。

天保9年(1838)正月22日には、飯田屋当主の亀太が40歳で亡くなり、15日後の2月6日に妻のユミが42歳で亡くなっている。残された息子の豊松が7年後の弘化2年(1845)に30歳で亡くなっている。豊松の墓石は親類等と考えられる田中為治郎が造立しており、これ以降の当該墓地での造墓活動からみる限りでは飯田屋の系譜は絶えているようである。

石見銀山内では、石造物調査による死没紀年銘の統計により、天保9年の死者がその前後の年の2倍に達していることが報告されている。天保の飢饉の前半では体力の弱い小人の死者が多いが、長引く飢饉の後半では大人の死亡が顕著である(鳥根県教委・大田市教委2024)。

飯田屋は、この天保の飢饉のために大きく人的なダメージを受けて衰退した家系と考えられる。



第4図 定徳寺脇墓地の石造物分布図 (S=1/50)

(2) 石造物の種類 (第5図～第10図)

徳善寺上墓地で確認された石造物については、35基が確認された。内訳は、石塔としては組合せ宝篋印塔3基、一石宝篋印塔4基、一石五輪塔5基、無縫塔2基、墓標としては笠付き方形墓標6基、円頂方形墓標2基、円頂方柱墓標7基、地藏2基があった。また、石廟は完存するものはないが、部材の検討から少なくとも1基(19、26)の石見銀山型石廟1類の存在が確認された。

特殊なものとしては、弘治3年(1557)の紀年銘を持つ阿弥陀三尊種子六字名号自然石板碑(1)や石幢的な特徴を持った石燈籠(23、24)がある。

ただし、現地では未だ土中に埋没し、地表に一部だけ露出しているものや下方に転落している石造物が少なからず存在する。完全に土中に埋没している個体も存在する可能性が高いことから実態はこれよりもさらに多い墓塔が造立されていたとみられる。

なお、石造物の種別や各型式分類は、島根県教育委員会・大田市教育委員会により、2005年に刊行された『石見銀山遺跡石造物調査報告5』及び、2024年に刊行された『石見銀山遺跡石造物調査報告書21』に基づいている。

一石五輪塔 (第5図)

3a類1基、3b類1基、3類1基、4b類2基、で構成される。各類型の出現時期を見ると、3a類(14)は天正20年(文禄元年)の紀年銘を持つことから天正年間には出現している。3類3基は全て白色凝灰岩製である。4b類は慶長期から出現するとされるが、当該墓地では元禄元年(1688)の製品が認められる。4類は福光石製(4)となっている。

一石宝篋印塔 (第5図)

3a類1基、3bないし4類3基で構成される。いずれも紀年銘が判読できないが、各類型の出現期間を見ると、3a類(6)は相輪部の上半が欠損

しているものの伏鉢が無文で、かつ白色凝灰岩製である。3a類は慶長初期に出現し元和期まで見られることが指摘されている。

3b類も慶長初期に出現し、元和期まで事例が知られる。4類については宝珠下の溝施工が特徴として知られる。5、13、35については相輪上半部が欠損しており型式が確定できないが3基ともに福光石製であることから寛永期以降に製作された4類の可能性がある。

組合せ宝篋印塔 (第5図)

相輪部2個、笠部2個、塔身1個、基礎1個が確認されている。いずれも福光石製である。

相輪部についてはC類1個体(21)が知られる。笠部(屋根)については、B1類1個体(3)、C類1個体(40)であった。

塔身は1個体(18)があり一面に日輪が陰刻される。その内側には梵字らしきものが認められるが判読できない。

基礎については、C2類1個体(8)が存在する。3+8+18で組み合わせると考えられ、全体で3類の宝篋印塔となる。

無縫塔 (第5図)

僧侶墓である無縫塔塔身は2基が確認されている。22は、下半部が土砂に埋もれているものの正立していることから原位置を保っている可能性がある。2基の無縫塔は、当該墓群を造営した氏族から輩出された僧侶墓の可能性がある。

地藏 (第5図)

2基が確認されている。2は、高さ57cmで両手は合掌している。10は、頭頸部が欠損しているが復元高は45cmほどである。地藏の衣文表現が丁寧であり、基部に陽刻の諸花連弁がほどこされる。□保2年の紀年銘があるが、享保2(1717)年の造立である可能性が高い。これまでの石見銀山遺跡の石造物調査では、地藏は小児の墓石であることが多く、2についても「童女」の銘がある。

笠付き方形墓標（第6図）

笠付き方形墓標は、これまでの石見銀山遺跡内の調査により、1660年代から出現して18世紀後半までの作例が確認されている。当該期の墓石の主流とはならないが1680～1730年代に造立のピークがみられる。石見銀山では中世的墓塔から近世的墓標への切り替わりの時期に出現するものとして知られる。

当該墓域では6基が確認されており、そのうち2基（27、28）は元禄12年（1699）の紀年銘をもつ同一人物の墓石である。28が当初墓石であり、27は回忌年などに再建した墓標と考えられる。7、9、25、29など古相のものは基礎部前面に陽刻の諸花を施すが、27、28などの新相のものでは、基礎部前面は無文であるか陰刻諸花となっている。

円頂方形墓標（第6・7図）

円頂方形墓標は、これまでの石見銀山遺跡内（銀山地区）の調査により、1660年代から出現して20世紀までの作例が確認されている。特に江戸時代中～後期（18世紀～19世紀後半）では、円頂方柱墓標に次いで墓標の主流型式となる。

当該墓域では15、33の2基が確認された。15は享保17（1732）年の紀年銘をもち、墓標基底に枘を設け、三面諸花付きの台座に据え付けて、さらに方形の基礎石に設置する。33は、文政11（1829）年の紀年銘をもち、二段の方形基礎石上に設置される。当該墓域の19世紀代の墓標は7基が円頂方柱墓標であることから、4歳の童女用の墓石としてこの型式を採用したのかもしれない。

円頂方柱墓標（第6・7図）

円頂方柱墓標は、これまでの銀山地区内の調査により、1680年代から出現して20世紀までの作例が確認されている。特に銀山地区において、江戸時代中～後期（18世紀～19世紀後半）を通じて最多造立型式の墓標となる。

当該墓域では8基が確認された。16は本体高31cmの小型品で、下部に陰刻諸花が施されない。紀年銘は寛巳□年なので、寛延2年（1749）もしくは寛政9年（1897）が考えられる。

19世紀に入ってから、7基の円頂方柱墓標が造立されるが、何れも「釈」法名の下に陰刻諸花を施すものである。文化3年（1806）～弘化2年（1845）の40年弱の期間に7基の墓標を造立したのは商人の家系とみられる「飯田屋」の屋号を持つ世帯である。

この7基の円頂方柱墓標は本体の下に方形切石の基礎を設けるが、31のみ3段で、その他の6基は2段である。

石廟（第8図）

石見銀山型石廟1類（島根県教委・大田市教委2024）の部材が3点余り確認された。内訳は、切妻屋根を構成する前後各3枚の屋根板材のうち2枚分と、梁あるいは桁などの上部構造の横材（26）1点である。基礎石や柱材、壁材は未発見であることから土中に埋められているものと考えられる。

切妻屋根の部材（19）は、三枚一組で片面を構成するもので、軒先側からみて左長辺側には隣接部材との組み合わせのための割り込みが施される。この屋根板材は、短辺38.5cm、長辺76cmであり、三枚の部材が組み合った時には屋根の軒幅は115.5cmとなる。これは、竹村丹後守墓石廟の屋根幅135cm、美郷町粕瀬の下波多野家3号墓石廟の122cmに次ぐ規模である（島根県教委・大田市教委2003、伊藤・西尾・持田2021）。

上部構造の横材（26）とみられるものは一辺13cm四方の角柱状で、残存長84cm以上である。一面の中央に高さ3cmほどの段差を持つ割り込みを設ける。

石廟は、大谷地区内の徳善寺上墓地で11基以上、龍源寺間歩上墓地でも11基以上発見されており、近年では大谷地区周辺での発見例が増加している。

石燈籠（第9図）

石燈籠の部材としては、竿（24）と中台（23）がある。竿は八角柱で幅は18cmである。中間に節を持たず、中台を受ける部分には直径12cm、高さ4.5cmの柄を設ける。このような竿部は、古代～中世期に造られた「重制石幢」の幢身と同様な形態であるが、中世末から近世にかけては「石燈籠」の竿にも流用される事例があるという（辻2012）。

中台は、平面では直径48cmの円形を呈し、下面中央には直径13cm、深さ6cmほどの柄穴を設ける。下面外縁には陽刻で八弁蓮花を表現し蓮座とする点も石幢的な要素である。

上面には、火袋の石材を嵌め込むための幅5cm、深さ3cmの溝が掘り込まれる。溝の平面形は方形であり、内法で17cm四方、外法で28cm四方である。火袋の内底には燈明皿などを置かれたための直径13cmの円形座が造られている。この円形座は中央をやや窪ませており、燈明皿を置いた際の安定が考えられた丁寧な造作である。

竿部断面形が八角形を呈し、節を持たないタイプの燈籠は大谷地区徳善寺上墓地で最も1基（30）確認しており、大谷地区で特徴的な事例として注目される。墓域内に追善供養行為を前提とした荘厳化装置である石燈籠が設置される点から見れば、被葬者・墓主の階層性の高さが類推される石造物である。

阿弥陀三尊種子六字名号自然石板碑（第10図）

この石碑は、紀年銘により弘治3年（1557）の造立であり、墓塔・墓石の造立が開始される35年前に単独で設置されたものである。

規模は、高さ114cm（土中部分を除く）、最大幅36cm、厚さ20～22cmほどの大きさである。

この石碑は、石見銀山周辺で採取できるデササイトの自然石を用いている。ただし、整形板碑の形状を意識しているとみられ、頭部を両側面から削り、尖頭状に仕上げている。背面は粗削りの痕跡を留める。

銘文が穿たれている正面側は、おおむね平坦・平滑な面であるが、僅かな波うち状の凹凸や母岩の気泡孔が多数認められる。人為的な研磨痕跡は認定困難でありことから自然面と考えられる。

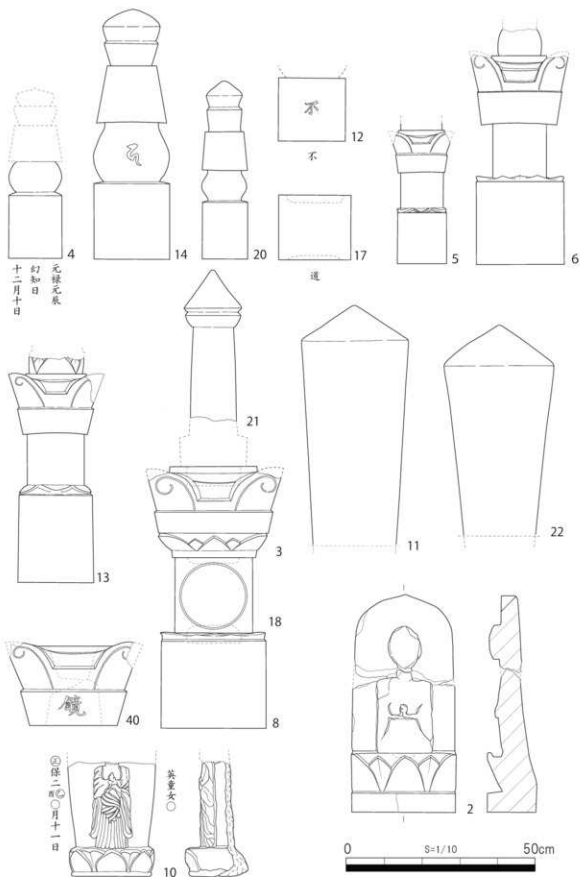
このように尖頭状に加工を施して正面観を整えているため、厳密には「自然石」とはいえない。

板碑としての碑文体裁は、最上部には「二条線」を略した一条線を施し、その下に阿弥陀三尊種子を配置する。

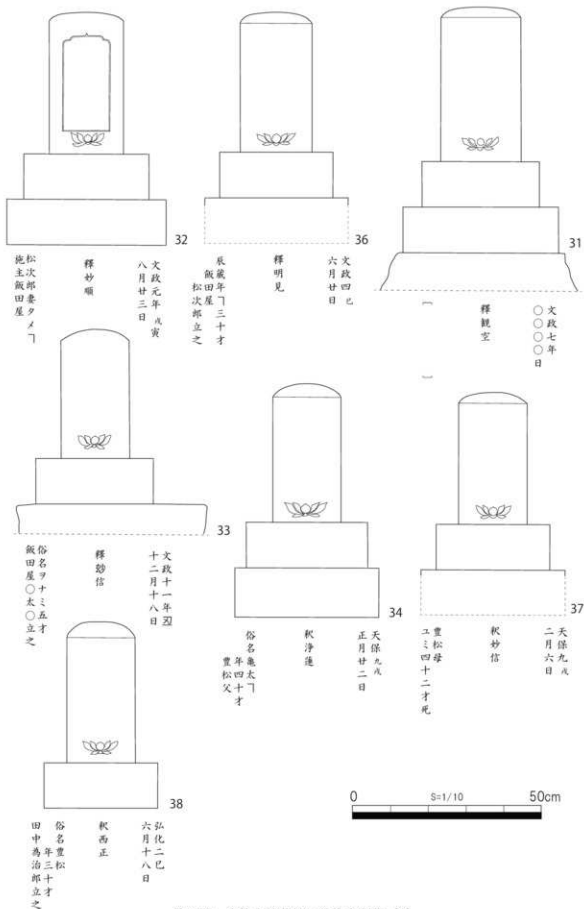
続けて主願文として「南無阿弥陀佛」の六字名号を中央に大きく彫り込む。主文の右側に浄土信仰で多用される撰益文（しょうやくもん、「観無量寿経」第九真身観の一節）を施し、左側には「妙法蓮華経」化城喻品第七に由来する回向文（えこうもん）を表している。碑面の下部に紀年銘、施主、造立目的が記されており、板碑としての内容がよく整えられ、文字情報量も多いものである。

主願文の右下に、弘治二年（1557）丁巳十一月十六日の紀年銘を刻字する。主願文の左下には造立者で夫婦とみられる為道立禪定門と同〇〇禪定尼の名が刻まれる。造立目的としては、各人の善根と逆修を願うものであり、在家信者の阿弥陀信仰をうかがわせるものである。

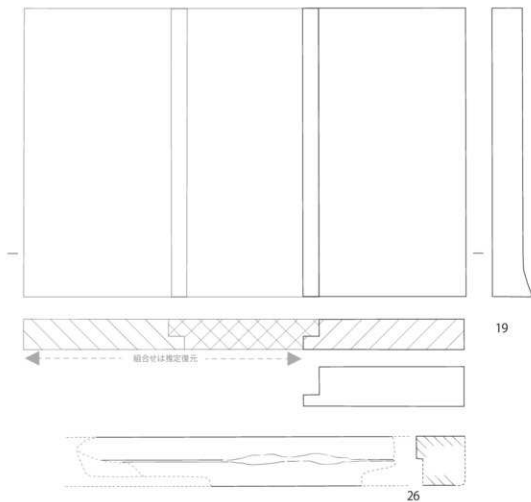
一方、この板碑は天正期以降に石見銀山周辺の石造物に頻繁に用いられる白色凝灰岩ではなく、在地で産出するデササイトを用いていることは前述したとおりである。さらに、板碑形に丁寧に整形されたものでなく、頭部側面のみ加工して尖頭状に整えて板碑らしい形状に近づけている。また、碑面に刻字される文字は字体、彫字技術ともに稚拙である。天正期以降に出現する白色凝灰岩を用いた石造物は、銘文の字体、彫字技術ともに一定の水準にあり、石塔造立の爆発的増加に対応した高い技術を持つ専門的工士の出現と安定的な継続が指摘されている。しかし、この板碑では石材の選定・加工方法に加え、銘文の字体、彫字技術からみてプロの工士ではなく、素人による制作が考えられる。この板碑についての詳細は第4節で記述する



第5図 定徳寺脇墓地石造物実測図(1)

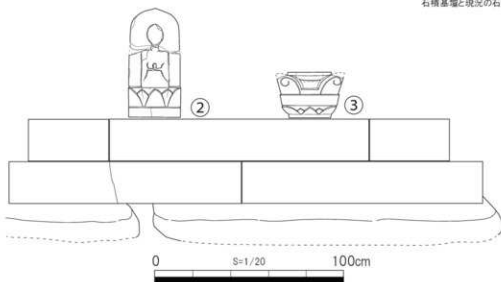


第7図 定徳寺脇墓地石造物実測図 (3)

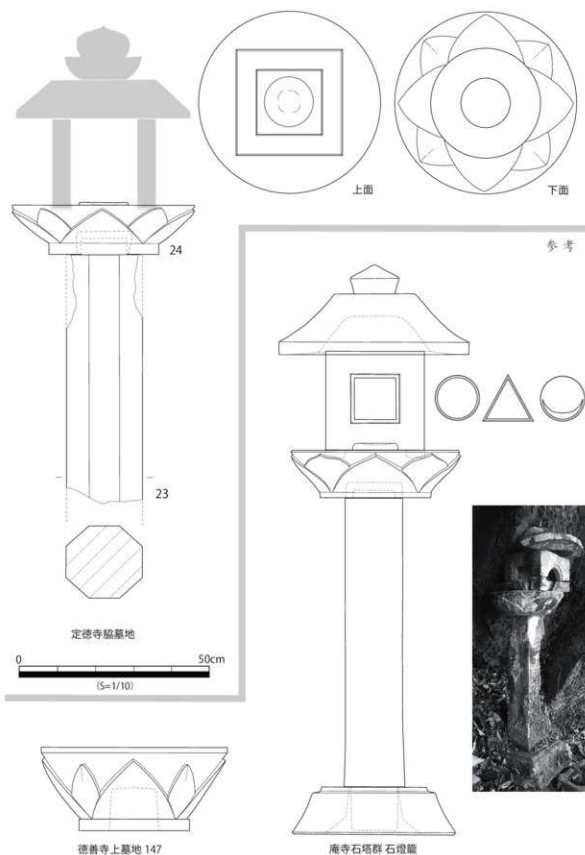


0 S=1/10 50cm

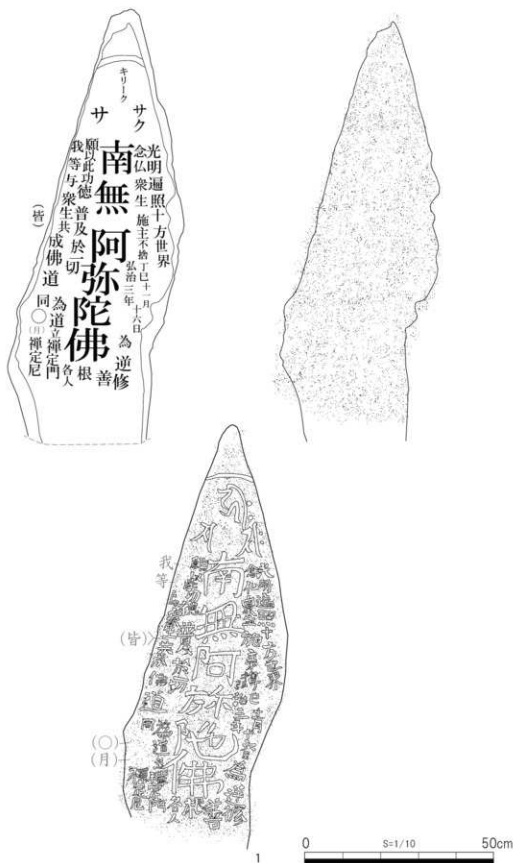
石構基礎と現況の石造物



第8図 定徳寺脇墓地石造物実測図(4)



第9図 定德寺脇墓地石造物実測図 (5)



第10図 定徳寺脇墓地石造物実測図 (6)

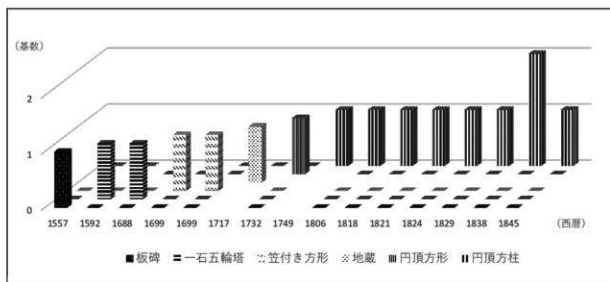
第4節 定徳寺脇墓地の特質

①石造物の造営年代と造立者（第11～14図）

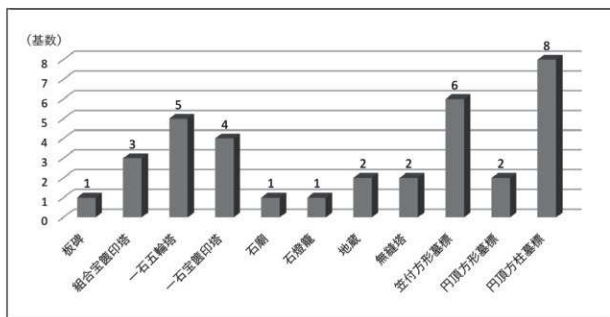
定徳寺脇墓地の造営は、石造物の造立活動の盛衰から、逆修板碑が造立された1557年前後をⅠ期として、天正20年（1592）～寛延2年（1749）まで継続的に造墓活動がみられる期間をⅡ期、屋号「飯田屋」の銘と「釈」法名をもつ円頂方柱墓標が継続的に造立される文化3年（1806）～弘化2年（1845）をⅢ期に区分することが可能である。ここでは、各期について造立の特徴を述べる。

Ⅰ期

板碑が造立された1557年は、尼子氏と毛利氏（具体的には両者の接点を領地とする国人衆）による石見銀山争奪戦の最中で、尼子氏方の本城常光が山吹城代として銀山を守備していた年である。このような戦乱の時期ではあるが、銀山開発が始まって30年ほど経過し銀鉱山として増産傾向にある時期でもある。



第11図 定徳寺脇墓地における墓石紀年銘の出現頻度



第12図 定徳寺脇墓地の石造物種別

鉾山開発では、第1世代が老境に至る時期であり、直接的な採鉾活動から離脱した高齢者層も多く存在していたと考えられる。そういった人々の中で支配階層に属する武家クラスの人々が在家信者として仏教信仰に身を置いたことは想定できるであろう。

石見銀山の石造物造立が鉾山採掘活動の第一世代の造墓活動として始まるのではなく、その前段の「逆修」行為に基づく板碑造立から開始されることは中世的な信仰形態の発現と捉えられる。また、中世を通じて板碑を造立するという意識や習慣が極めて希薄な石見地域において、唐突に出現するこの板碑の存在は他地域出身者の関与を強く示唆するものである。

続くⅡ期の造墓活動までは35年の間隔があるが、この板碑がⅡ期の石塔造立の基点となることがうかがえる。

Ⅱ期

Ⅱ期に属する墓塔・墓標では、紀年銘が確認できるものは7基であるが、石造物の型式から判断して当該期に帰属する五輪塔、宝篋印塔、地藏、無縫塔、笠付き方形墓標の総数は21基となる。

従来の悉皆調査により、銀山地区の石造物造立活動は16世紀末(1590年代)～17世紀初頭(1730年頃まで)が第一のピーク期として知られる。この時代は銀生産の最盛期にあたり、多くの人々がここに居住し鉾山活動に従事していたことの反映として捉えられる。

しかし、当該墓地では、銀山地区全体の様相とは異なり石造物造立活動のピークがみられない。安定的に10年～20年程度のスパンで墓石造立が行われることが特徴である。

このことから、複数の家系集団が合同で造墓する墓域ではなく、ある単系一族の墓域として機能していたと捉えることができる。銀山地区の中では少数派の事例であるが、多様な造墓パターンの存在がうかがわれる事例として貴重である。

Ⅱ期に帰属する石造物は大半が倒壊し原位置を

留めていない。かろうじて原位置に正立していると思われる無縫塔や石燈籠も基部付近は堆積土に覆われている。このことは、墓域として継続的な祭祀や管理が行われていないことを暗示しており、Ⅲ期の墓群との関連性が問われる。

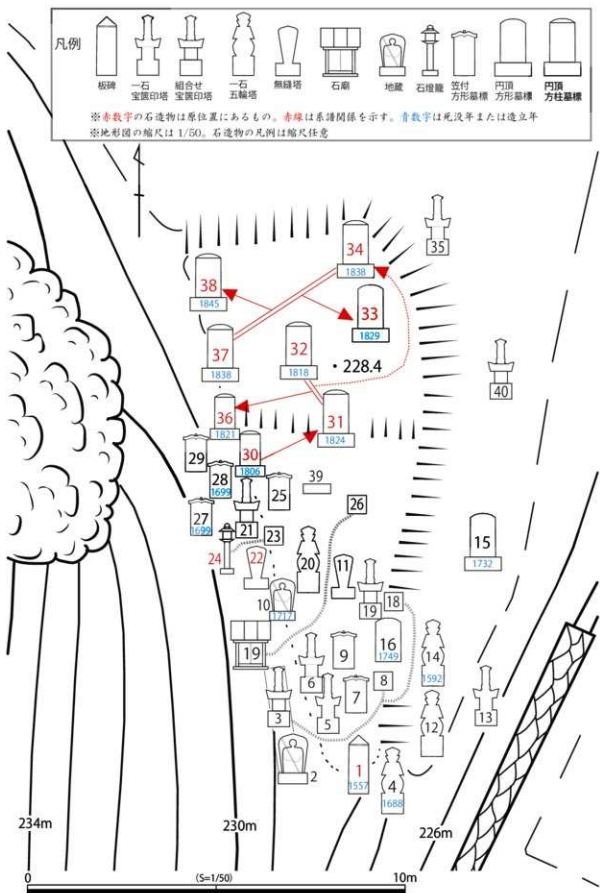
Ⅲ期

Ⅲ期に帰属する墓標では、紀年銘が確認できるものは8基がある。内訳は円頂方柱墓標が7基、円頂方形墓標が2基である。

Ⅱ期の最終造墓は(16)の墓石紀年銘から寛延2年(1749)前後と考えられる。Ⅲ期の最初の造墓は(30)の文化3年(1806)であり、50年以上の造墓空白期が認められる。Ⅲ期の墓群は、いずれも切石積み基壇に乗った状態で維持されており、保存状態はⅡ期の墓石と大きく異なっている。

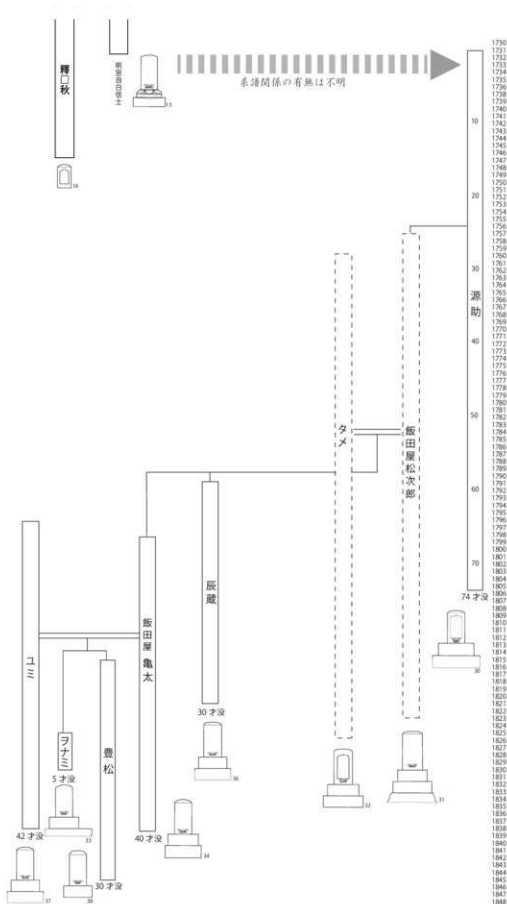
Ⅲ期の墓石には墓主として「飯田屋」の刻銘を持つものが3例(32、33、36)認められる。他の墓石の銘文と照合したところ、第14図のように系譜が復元されることから、「飯田屋」と称する町人・商人の家系の墓域であることが想定された。

銀山町内では三原屋、出雲屋、乙倉屋などの屋号を持つ商人が居住したことが明らかであるが、「飯田屋」に関する内容がみられる古記録・古文書は管見の限り知られていない。



第13図 定徳寺脇墓地の石造物分布図 (2) (S=1/50)

1730
1731
1732
1733
1734
1735
1736
1738
1739
1740
1741
1742
1743
1744
1745
1746
1747
1748
1749
1750
1751
1752
1753
1754
1755
1756
1757
1758
1759
1760
1761
1762
1763
1764
1765
1766
1767
1768
1769
1770
1771
1772
1773
1774
1775
1776
1777
1778
1779
1780
1781
1782
1783
1784
1785
1786
1787
1788
1789
1790
1791
1792
1793
1794
1795
1796
1797
1798
1799
1800
1801
1802
1803
1804
1805
1806
1807
1808
1809
1810
1811
1812
1813
1814
1815
1816
1817
1818
1819
1820
1821
1822
1823
1824
1825
1826
1827
1828
1829
1830
1831
1832
1833
1834
1835
1836
1837
1838
1839
1840
1841
1842
1843
1844
1845
1846
1847
1848



第14図 定徳寺脇墓地における18～19世紀代の系譜関係

②特徴的な石造物

1. 阿弥陀三尊種字六字名号自然石板碑

定徳寺脇墓地で確認された石造物の内、紀年銘が確認されたものは35基中の15基であった。その中で最古の年号を持つものが板碑(1)である。

これまで石見銀山遺跡内で最古の紀年銘を持つ石造物は、元龜3(1572)年の紀年銘を持つ、龍昌寺跡墓地の組合せ宝篋印塔(164)が知られていた(鳥根県教委・大田市教委2002)。このたび発見された板碑はそれを15年遡るもので、石見銀山遺跡の石造物造立史を更新する銀山開発初期のものである。

さて、定徳寺脇墓地の石造物は、平坦面の南端に設置された板碑(1557年)を基点として造立が開始され、年代が降るにつれて北側に造墓域を拡げる状況が認められた。

この墓域での墓塔・墓標の造立は、戦国時代末の天正20年(1592)から始まり、江戸時代末の弘化2年(1845)まで継続的に造墓活動が認められる。一方、六字名号自然石板碑は弘治3年(1557)の造立であり、墓塔・墓石の造立が開始される35年前に単独で設置されたものである。

この板碑は、浄土宗系の阿弥陀信仰を持つ、在家の信者夫婦が自らの逆修・善根を願って生前に造立したことが碑文からうかがえる。

板碑は、自然石を用いているが、整形板碑の形状を意識して頭部を尖頭状に加工して整えているため厳密には「自然石」とはいえない。

板碑としての体裁は、最上部には「二条線」を意識した「一条線」を施し、その下に阿弥陀三尊を種字で表して、続けて主文の「南無阿弥陀佛」を中央に大きく彫り込む。主文の右側に浄土宗で多用される摂益文(しょうやくもん)を刻字し、左側には妙法蓮華経に由来する回向文(えこうもん)を表している。碑面の下部に紀年銘、施主、造立目的が記されており、板碑としての内容がよく整えられ、文字情報量も多いものである。

一方、この板碑は戦国時代末以降に石見銀山周辺の石造物に頻繁に用いられる白色凝灰岩や福光

石(緑色凝灰岩)ではなく、在地で産出するデイサイトの自然石を用いている。整形板碑のように丁寧に加工されたものでなく、頭部側面のみ加工して尖頭状に整え、板碑らしい形状に近づけている。また、碑面に刻字される文字は字体、彫字技術ともに稚拙である。石見銀山周辺で1570年代以降に出現する白色凝灰岩を用いた石造物は、銘文の字体、彫字技術ともに一定の水準にあり、技術的に安定した専門石工の出現と継続性が指摘されている。しかし、この板碑では石材の選定・加工方法に加え、銘文の字体、彫字技術からみてプロの石工ではなく、素人による制作が考えられる。

■「板碑」発見の意義～信仰からみた初期銀山～

石見銀山の開発を担った第一世代の鉱山師・武士階層による石造物造立の実態は、石造物調査開始以来長く不明な状態であったが、この度の板碑確認により幾つか明らかとなった点がある。

石見銀山での石造物造立が、「造墓」からではなく、「逆修善根」を目的とした板碑造立から始められたことは、初期鉱山社会の信仰形態をうかがう上で興味深い。

板碑の寄進者が阿弥陀信仰を持つことは銘文からも自明であるが、六字名号の左右に配置されている摂益文、回向文はその信仰内容を確認するうえで注目される。摂益文は、「光明はあまねく十方世界を照らし、念仏の衆生をば摂取して捨てたまわず」=阿弥陀仏の救いの光明は、念仏を称える衆生たちを余すところなく照らし極楽往生に導く」という「観無量寿経 第九真身観」の一節であり、偉大な阿弥陀佛を一心に称える偈文である。

一方、「妙法蓮華経」化城喻品第七の一節に基づく回向文は、「願わくばこの功德をもって、あまねく一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」=願わくば(我がらが念仏を唱えることによって得られた)この功德が、(自分たちだけでなく)平等に(この銀山で働く)すべての人々に

与えられ、皆同じように悟りを得て、極楽浄土へ往生できますように、という偈文である。主に天台宗・真言宗で唱えられる。

浄土真宗の回向文は、『観無量寿経疏』の第一巻「玄義分」冒頭の帰三宝偈の一節をもとにする。「願似此功德 平等施一切 同発菩提心 往生安楽国」＝願わくば、この念仏の功德が平等に全ての人々に与えられ、皆が共に仏道を求める志をおこし、極楽浄土へ往生できますように、である。

しかし、旧仏教の回向文は寄進者自らの称名念仏の行為により得られた功德・果報を自らだけでなく全ての人々に振り分ける「自力本願」の意思が含まれており、浄土真宗の回向文では「阿弥陀仏」の全面的な救済を称える「他力本願」が真意である。

寄進者である禅定門・禅定尼夫妻は、自ら唱える称名念仏が、自分たちだけでなく銀山で働くすべての人々の救済に繋がることをこの偈文に込めている、と読めば銀山領有を賭けた争乱に巻き込まれながらも銀山社会内では互助精神に満ちた共同体的社会であった可能性も読み取れる。

■「板碑」発見の意義～板碑不在地域での発見～ (第15～18図)

「板碑」は中世を代表する石造物であるが、日本列島に均一に分布するのではなく、空間的分布や継続性は地域により大きな差異・粗密がある。

山陰地域では、13～14世紀代に石製板碑の祖型となる木製板碑が製作・樹立されていたことが出雲（出雲市・山持遺跡）、伯耆（米子市・吉谷亀尾前遺跡）の出土例から指摘されている（鳥根県教委2007、(財)米子市教育文化事業団2006、中森2012）。

出雲国では天台宗・清水寺の影響が強い安来平野において13世紀後半～14世紀に整形板碑、自然石板碑の製作・樹立例がみられる（播磨1987、今岡俊1991・1994、今岡利2012、岡崎ほか2022）。

また、15世紀代には天台宗・鰐淵寺の影響が強い島根半島西部で小型の整形板碑の製作・樹立例がみられる（播磨1987、烏谷2015、多根1996、原1984、今岡2011）。

15世紀～16世紀には、中世府中が所在した松江市の茶臼山周辺でも変容した整形板碑や自然石板碑の造立が認められる（播磨1987、鳥根県教委1990、今岡1994）。

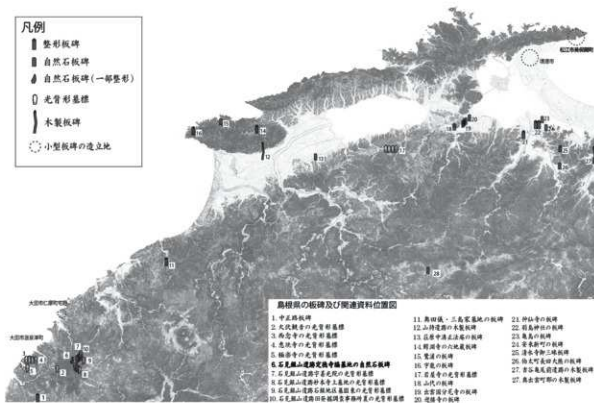
このように出雲部では、天台宗寺院の影響が強い地域を核に若干の板碑造立が認められるのであるが、それでも20基程度の数であり、板碑造立の習慣・意識の希薄な地域と捉えることができる。（第15・16図）

そして、石見国においては、中世期に遡る整形板碑・自然石板碑はこれまで知られなかった。ただし、大田市温泉津町井田の中正路板碑は真言宗高野寺の入り口に位置し、宝暦三年（1857）の紀年銘を持つが（鳥根県教委・大田市教委2010）、先行する中世期板碑の破損等による再建の可能性が考えられるものである。（第17図）

しかしながら、石見部では中世を通じて板碑を造立する習慣・文化が希薄であったことは明確である。そのような中で、1557年に石見銀山大谷地区に突如として出現したこの阿弥陀三尊種字六字名号自然石板碑の造立背景には、板碑文化を知る他国出身者の関与が強くうかがわれるのである。初期石見銀山の開発経営には地元だけではなく、多くの他国出身の武士、技術者階層の入り込みが推測される。⁸¹⁾

なお、石見銀山との関連では出雲市多伎町奥田儀の三嶋家墓地に所在する慶長五年銘の逆修供養塔が目される（田中・原田2002、松尾2004）。三嶋家はいわゆる『銀山日記』に登場する石見銀山発見伝承に博多商人・神屋寿禎とともに登場する三嶋清右衛門の後裔である。清右衛門は田儀を本拠とする商人であり、かつ杵築の鸛銅山主でもある要人である。

さて、この逆修塔は高さ148cm、幅34cmで頂部は尖頂状を呈し、正面観は整形板碑を思わせる。



石見縣山道跡 定徳寺臨墓地板碑



三島家墓地 板碑 (出雲市多伎町)



仲仙寺 板碑 (安来市西条江町)



羽島神社板碑 1 (安来市飯島町)



中庄路 板碑 (大田市温泉津町井田)



惠光寺 光背形墓標 (大田市温泉津町)



中瀬正法庵 板碑 (出雲市山代町)



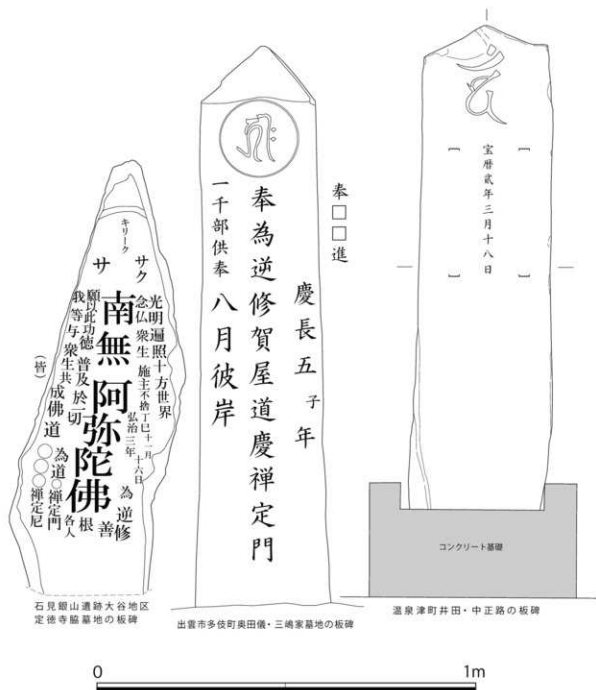
清水寺惣三味板碑 (安来市清水町)

第15図 島根県内の板碑および類似する石造物分布図

時代	石見	出雲	伯耆	
13世紀	木製板碑？	 木製板碑 （天台・清水寺周辺） 整形板碑 出雲市 山神邊跡出土木製板碑	 米子市 吉谷屯堀跡出土木製板碑	
14世紀				
15世紀	板碑造立の習慣は希薄	整形板碑 （天台・鯛洲寺周辺）	自然石板碑 （松江・中世府中周辺）	
16世紀	 石見銀山遺跡大谷地区・定徳寺跡墓地	 出雲・三嶋原墓地の墓碑	小型板碑・光背形	
17世紀	 大田市温良津町井田の板碑	 松江市中津の板碑		
18世紀				

※石製板碑図は縮尺 1/40
木製板碑図は縮尺 1/80

第16図 山陰地域における板碑造立の傾向と地域性



※三嶋家墓地板碑の図面は、松尾克昌 2004 「多伎町の近世石造物」『東洋ストーン研究』5
東洋ストーンミュージアム 岡蔵園の再トレース
井田中正路の板碑の図面は、島根県教育委員会・大田市教育委員会 2010 「石見郡山道跡
石造物調査報告書 10 金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物」岡蔵園の再トレース

第17図 大田市周辺の板碑および関係する石造物

Figure 1-1-1 shows five line drawings of Buddhist stupa markers (stupa markers) from the Wanshan Temple in Wuyuan, Jiangxi. The markers are labeled 1 through 5. Marker 1 is a tall, slender marker with a pointed top and a base. Marker 2 is a shorter, wider marker with a pointed top and a base. Marker 3 is a tall, slender marker with a pointed top and a base. Marker 4 is a shorter, wider marker with a pointed top and a base. Marker 5 is a tall, slender marker with a pointed top and a base. The text on the markers includes '南無阿彌陀佛' (Namo Amitayus) and '萬壽寺' (Wanshan Temple).

[illegible]

— 34 —

正面上部に阿弥陀如来の種子キリクを現し、その下に「奉為逆修賀屋道慶禪定門」の主文と「慶長五〇年 一千部供養 八月彼岸」の紀年銘・造立目的を刻字する。慶長5年(1600)の造立であることから、三嶋清右衛門と繋がりとがあると仮定すれば、孫世代の造塔と考えられる。なお、田中圭一は、慶長5年に大久保長安により伊豆、さらに佐渡金山に招聘された三嶋惣左衛門をこの逆修塔の造立者に比定する。同年に田儀を去ることになった惣左衛門が故地に逆修塔を残し東国に旅立った、という解釈について実証性は不確かであるが魅力的な説である。

この、逆修塔には左右の両側面にも、観音菩薩と勢至菩薩と考えられる種字と判読不明の刻字があり、板碑の定義としてあげられる「一観面」の原則から逸脱する。ただし、碑文の内容としては阿弥陀三尊種字を主文とする阿弥陀信仰を基調とする逆修であることから、定徳寺脇板碑と年代・信仰内容が近似するものであり類例として関連性を考えることは有意である。三嶋氏は天台宗鸕淵寺の影響が強い島根半島西部で鉱山経営を行っており、海上交易により諸国の情報も得られる立場にあることから、板碑造立に関する情報に接触する機会があったのかもしれない。(第17図)

「板碑」という中世を通じて石見国とは疎遠な存在の石造物が銀山開発と共に招来されたことは、他国の文化・人材の流入を如実に物語る物的な資料として重要である。

II. 石燈籠

石燈籠は、竿(24)と中台(23)部分だけが発見された。竿は横断面の形状が八角柱で、中間に節を持たない。このような竿部は、古代～中世に造られた「石幢」の幢身と類似した形態であるが、中世末から近世にかけては「石燈籠」の竿にも流用される事例がある。

中台は、平面で円形を呈し、下面中央には柵穴を設ける。柵穴の外縁には陽刻で八弁の連弁諸花を表現し蓮座となる。

上面には、火袋の石材を嵌め込むための溝が掘り込まれる。溝の平面形は方形であることから火袋の形状は直方体であることがわかる。中台の上面には燈明皿などを置くための中央に窪みを持たせた円形座が造られている。

石見銀山内では、16世紀末～17世紀前半のいわゆる銀山最盛期に造墓活動のピークを迎えた墓域が多く存在する。これらの墓域では大型の組合せ宝篋印塔などが競うように造立されているが、墓の「荘厳化」や「厚葬化」を志向するものは少ない。その中でも後述する石廟は荘厳化・厚葬化を志向する道具立てであり、大谷地区で盛行することは特筆される。

定徳寺脇墓域で発見された、石燈籠の竿(24)と中台(23)の存在は、墓域での演出装置の一つとして特筆される。石燈籠の存在は、石塔の造立という一過性の行為だけでなく、命日、盆、彼岸、回忌供養などの継続的な墓参りや墓地の管理行為を暗示するものである。石見銀山内の墓域では基壇、基礎に水盤や花立を備える墓石が一定数存在することから、墓参の習慣があることがうかがえるが燈籠のように大掛かりな装置は限られる。

平成5年度に悉皆調査を実施した徳善寺上墓地において、八角形の竿(30)、円形中台(147、194)、屋根(140)を確認しており、大谷地区周辺での墳墓祭祀の特徴として挙げることができる。

また、大田市仁摩町大国の庵寺石塔群では、ほぼ完全にパーツが揃った個体が見つかった(島根県2019)。基礎と竿は平面方形で、中台は蓮座を施した円形であり、中台上面には方形溝を削り込み平面方形の火袋を据え付けている。火袋は四面に方、円、三角、三日月形の異なる形状の窓が配置される。屋根は円形で頂部に宝珠を取り付ける。全高は151cmほどになる。基礎は福光石製であることから後補と考えられるが、他の部材は白色凝灰岩製であり、蓮座の連弁が曲線的に造作されることから慶長期の所産と考えられる。型式と



第19図 石見銀山型石廟 I 類の比較

作風及び使用石材からみて定徳寺脇墓地の燈籠の直前に製作された事例とみられる。(第9図)

17世紀代の燈籠は製作例が少なく、個体差がみられるが竿には節がなく方形ないし八角形を呈する点に加え、中台が円形で蓮座になる点は共通する。ある程度確立した型式を呈することから、導入の経緯やルーツの検討が今後の課題である。定徳寺脇墓地で確認された石燈籠は、無縫塔や石廟とセットになるものと想定され、福光石を用いて製作されることから17世紀前半(寛永期以降)～後半の所産と考えられる。

江戸時代初期においては、寺院・神社の境内地や庭園以外では、大名など有力武士階層の墓域でしか導入されていない石燈籠が設置されることを鑑みると、造立者の帰属階層の高さと仏教への造詣の深さがうかがえるものである。

また、特徴的な横断面八角形で中節のない竿部や平面円形で下面を蓮座とする中台などは、18世紀以降の時代に石見銀山内の寺社に奉獻される石燈籠の型式には継承されていない。17世紀前半という中世的様相を色濃く引き継ぐ時代の石燈籠型式として、類例は少ないながらも重要な作例といえる。³²⁾

III. 石廟

石見銀山型石廟Ⅰ類が一棟確認された。ただし、発見された構成部材は、切妻屋根を構成する前後各3枚の屋根板材のうち2枚分と、梁あるいは桁と考えられる上部構造の横材1点である。

この屋根板材は、短辺38.5cm、長辺76cm、厚さ8cmであり、軒部先端の上面は若干の反りを持つために軒端は厚さ10.5cmとなる。3枚の部材が組み合った時には屋根の軒幅は115.5cmほどに復元できる。これは、竹村丹後守墓石廟の屋根幅135cm、美郷町粕淵の下波多野家3号墓石廟の122cmに次ぐ規模である。(第19図)

石廟Ⅰ類は他に、大谷地区徳善寺上墓地でも1棟以上存在することが確認されている。

石見銀山型石廟は、徳善寺上墓地で11基以上、

龍源寺間歩上墓地でも11基以上発見されており、近年では大谷地区周辺での発見例が増加している。また、龍昌寺墓地、大龍寺墓地、長楽寺墓地、字甚光院墓地、妙本寺上墓地でも石廟Ⅱ類・Ⅲ類が確認されている。

令和以降の悉皆調査により、大谷地区内で少なくとも2棟の石見銀山型石廟Ⅰ類が確認されたことは特筆される。石見銀山型石廟Ⅰ類は、2代目石見銀山奉行竹村丹後守道清の墓所として、竹村の師でもある大久保長安の逆修塔を納める佐渡島大安寺の越前式石廟を模倣したものが起源と考えられる(鳥根県教委・大田市教委2024)。

この石廟Ⅰ類が2基以上存在することは、大谷地区在住の鉾山師などの要人と竹村丹後守道清や息子で3代奉行の竹村藤兵衛萬嘉との強い関係性を類推させるが、その具体的な内容は定かではない。粕淵方面の石見銀山街道の整備に尽力した下波多野家墓所で石廟Ⅰ類が採用されていることを鑑みれば、竹村丹後守の指揮による鉾山開発の要所や街道整備地点で成果を出した人物に石廟Ⅰ類の採用が許された可能性があるであろう。

第5節 小結

定徳寺脇墓地は、平成13年度に実施された石造物分布調査により、4基の石塔の存在が把握された。その後、石造物調査の主軸が下河原、石銀、枳畑谷、昆布山谷方面に遷移する中で、大谷地区は石造物調査の潮流からやや外れた地域となっていた。

令和5年度に大谷地区・徳善寺上墓地の石造物悉皆調査を実施し、165基以上の石塔、石廟などが林立していたことが確認された。当初の想定を超えた石造物群の発見により、石見銀山最盛期における大谷地区の重要性や独自性が一部ではあるが俄かに顕在化してきたといえる。これにより、徳善寺上墓地に隣接している定徳寺脇墓地の悉皆調査が期待されていた。

当該墓地は総数35基の小規模な墓群であることが確認されたが、前述したようにその内容は特

筆すべきものがあつた。石見銀山型石廟Ⅰ類や中世的な石燈籠の発見はもとより、石見銀山最古の紀年銘をもつ板碑の確認は青天の霹靂であつた。

石見銀山においてこの大谷地区は龍源寺、紺屋後、小吹屋後、甘南備、荒神、恵珍山など生産量の多い重要な間歩群を擁する鉱山生産の要地の一つであることに加え、坂根口・畑口番所が近隣に所在し、温泉津・仁摩方面から銀山柵之内にアクセスするための交通上のボトルネック的要衝でもある。

大谷地区の重要性は、近年の発掘調査でも少しずつ明らかとなりつつあるが、石造物調査においても調査研究の進展が期待される。現在、定徳寺脇墓地は史跡指定地外となっているが、各分野の調査研究の進展により、坂根口番所付近の歴史の変遷がより明確になれば遺跡保護の在り方も再検討されるであろう。

註

①山陰地域において、「板碑」を集成・検討する際に「小型板碑」、「光背形板碑」を含めて考える場合がある。しかし、以下の理由により本節では両者を除外して集成・検討している。

「小型板碑」は、益田、浜田、温泉津、宅野、美保関、境港など山陰地域の港町を中心に分布している。多くは高さ50cm前後、幅20cm前後の小型品で、尖頂状の頭部に額があるものもある。基部は地面に埋め立てるため粗く尖り気味のものが多く、碑面には五輪塔、宝篋印塔を浅く陽刻するものと仏像・地藏様の浮彫を施すものに大別される。各地域で先行研究や調査例が蓄積しており近年注目されているものである（伊藤1978、今岡1995・2016・2019・2020・2021、佐々木1956、佐伯2015、畠中1984、鎌田2000、濱野・佐伯2016、濱野2020、間野・伊藤2022、榊原・藤田2023、間野2023、益田市教委2017、2020）。

これらの「小型板碑」は整形板碑が矮小化したような形態をとることから、「板碑」の範疇に含んで説明されることが多い。しかしながら、この

ような「小型板碑」は銘文がある事例がほとんどなく、厳密な制作年代や信仰形態、造立趣旨、造立者の情報が不明である。これらの小型板碑のルーツが若狭・丹後地域にあることは多くの指摘があり、船舶のバラストとして船底に積まれたものを寄港した西日本の各港町で積荷が増えた時に下ろしたものと、とする解釈がある。とすれば「小型板碑」は本来の板碑のように造立者の強い意図・意思が体现した宗教的造物物ではなく、交易活動の副産物という側面が強いと言えよう。

このように「小型板碑」は流通・経済史的な意義は大きい、仏教信仰の面から見れば造立者の意思が汲み取れない客体的な性格と見られるためにここでは除外して考える。

「光背形板碑」とされるものは松江市宍道町、大田市などに分布するが、その中でも温泉津と石見銀山遺跡で集中的な分布状況を示している。多くは高さ1mを超え、幅30cm前後の大型品で、頂部は舟先状となる。また、後出的な形態では駒形のものもみられる。（第18図）

松江市宍道町の岩屋寺に所在する4基の光背形板碑について、これまでいくつかの紹介がある（播磨1987、今岡1994、岩屋寺石造物調査団2008）。これらの報文では「板碑」として光背形のものを紹介するが、石見銀山遺跡で長年石造物調査を指導してきた池上悟は、温泉津や石見銀山遺跡内で確認されたこの種のものを関西（南山城・北大和）の「光背形墓標」をルーツとする墓石とみる。また、同様の形態をとるものは尾道、唐津など瀬戸内海沿岸・九州北部でも確認できることから西国に流布した墓石型式の一つと推定している。ただし、この型式発生の背景・ルーツについては今後検討の余地があることも指摘しており、「板碑」なのか「墓標」なのか見解が定まてはいない。碑文の内容が「板碑」に類する供養・逆修といえるものもあるが、個人の墓碑とされるものもあり性格付けの難しい一群である。

また、祖型とされる近畿地方の古相の光背形墓標は軒並み小型のものであるが、石見銀山周辺で

慶長期に出現するものはいずれも高さ1mを超える大型品である点は「板碑」的な要素である(池上2006、2007、2010、2024、鳥根県教委・大田市教委2011)。

光背形石造物の一群は、慶長期に集中的に製作されており、17世紀中頃以降の製作例は見当たらない。この様相から見れば中世的な石造物といえるものであるが、系譜・性格を含め今後の検討が必要である。

②鳥根県東部においては江戸時代前期以降に來待石製の燈籠が製作されているが、松江市・圓成寺庭園に設置されている慶長9年(1604)銘をもつ六角地藏燈籠が最古の作例という。この燈籠を検討した林秀樹によると、竿の上部六面に地藏を配置した龕を配置し、その上に中台・六角火袋を設置する特殊形態とする。これを古代・中世的な「石幢」と「燈籠」が融合したものと捉え、「石幢」としての機能を主と捉え、「燈籠」としての機能を副次的なものとする(林2022)。

山陰地域は中世期に石幢造立の習慣が希薄であり、支配者階層の人の移動が顕著となった近世初頭には、このように各所で「石幢」と「燈籠」の型式的混交がみられるものが造立されている。

参考文献

- 池上悟 2006『V恵光寺墓地の石造物 3. 古相の墓石』『石見銀山遺跡石造物調査報告書6』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 池上悟 2007『西念寺墓地の調査』『石見銀山遺跡石造物調査報告書7』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 池上悟 2010『第3章金剛院墓地の調査 第7節温泉津地区における特徴的な墓石』『石見銀山遺跡石造物調査報告書10』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 池上悟 2024『石見銀山墓石の周辺地域墓石との対比』『石見銀山遺跡石造物調査報告書21』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 伊藤節、西尾克己、持田直人 2021『邑智郡・美郷町・下波多野家墓地における石塔・墓標の変遷』『石見銀山遺跡の調査研究11』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 伊藤節之輔 1978『石見の石造美術』
- 今岡隆 1991『山陰の石塔二三について-2-』『鳥根考古学会誌』第8集 鳥根考古学会
- 今岡隆 1994『山陰の石塔二三について-3-』『鳥根考

- 古学会誌』第11集 鳥根考古学会
- 今岡隆 1995『山陰の石塔二三について-4-』『鳥根考古学会誌』第12集 鳥根考古学会
- 今岡利江・今岡隆 2011『山陰の石塔二三について-17-』『鳥根考古学会誌』第28集 鳥根考古学会
- 今岡利江 2012『仙仙寺阿弥陀名号板碑』『日本石造物辞典』日本石造物辞典編集委員会 吉川弘文館
- 今岡隆 2016『山陰の石塔二三について-21-』『鳥根県考古学会誌』第33集 鳥根考古学会
- 今岡隆 2019『鳥取県境港市に残る小型石仏と宝篋印塔について』『日引』第15号 石造物研究会
- 今岡隆 2020『鳥取県の小型石仏・石塔など』『鳥根考古学会誌』第37集 鳥根考古学会
- 今岡隆 2021『浜田市長浜町の石仏・石塔について』『鳥根考古学会誌』第38集 鳥根考古学会
- 岩屋寺石造物調査団 2008『岩屋寺石造物調査報告』『米待ストーン研究』9 米待ストーンミュージアム
- 大田市教育委員会 2021~2023『石見銀山遺跡発掘調査概要』28~29
- 大田市教育委員会 2025『石見銀山遺跡発掘調査報告書V大谷地区』
- 岡崎雄二郎、西尾克己、稲田信、木下誠、樋口英行 2022『安来、清水寺の御三味遺跡石塔群について』『松江歴史館研究紀要』第10号 松江歴史館
- 鎌田廣善 2000『浜田の仏像・供養塔から窺う神まで 古里の石仏』
- 佐伯純也 2015『山陰歴史館所蔵板碑群に関する一考察』『米子市立山陰歴史館紀要』第2号 山陰歴史館
- 棚原博英・藤田大輔 2023『浜田市における中近世石造物』『古代文化研究』第31号 鳥根県古代文化センター
- 佐々木謙 1956『山陰の板碑』『ひすい』31号 佐々木古代文化研究室
- 三瓶古文書を読もう会 1995『石見銀山百か寺』
- 鳥根県教育委員会 1990『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告VII 茶臼山城跡・市場遺跡・内堀石塔群』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2 龍昌寺跡』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3 安養寺・大安寺跡・大龍寺跡・奉行代官墓所外』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5 分布調査と墓石調査の成果』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10 金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11 極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13 大谷地区本経寺墓地の調査』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2024『石見銀山遺跡石造物調査報告書21 分布調査と墓石調査の成果(2005~2022)』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2024『石見銀山遺

- 跡石造物調査報告書22 下河原地区豊栄神社・大谷地区
徳善寺上墓地」
- 島根県教育委員会 2007『山持遺跡Vol.2 II・Ⅲ区』
- 田中圭一・原田洋一郎 2002『石見銀山をめぐる人々』『石
見銀山関係論集』島根県教育委員会
- 島根県教育委員会 2019『重水遺跡・松林寺遺跡・庵寺石
塔群』
- 多根令己 1996『米待石の石造品紹介』『宍道町歴史叢書』
1 宍道町教育委員
- 辻俊和 2012『石幢』『日本石造物辞典』日本石造物辞典
編集委員会編 吉川弘文館
- 島谷芳雄 2015『第6章石造物調査 第1節 鰐淵寺石造
物調査の概要』『出雲鰐淵寺埋蔵文化財調査報告書』出雲
市教育委員会
- 中森祥 2012『山陰における中世前期の墓標と墓』『石川
県埋蔵文化財情報』第27号（財）石川県埋蔵文化財セン
ター
- 西尾克己・持田直人 2024『美郷町・松林山定徳寺につい
てー石見銀山百か寺の調査ー』『石見銀山遺跡の調査研究
14』島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 瀬野浩美・佐伯純也 2016『伯耆地方における中世石塔祭
祀終焉期の様相』『山陰地域における中世墓終焉期の様相』
中世葬送墓制研究会
- 瀬野浩美 2020『山陰 中世墓終焉の石塔』『中世墓の終
焉と石造物』高志書院
- 林秀樹 2022『円成寺庭園で庭の見せ場「景趣絶佳」を探
る』『令和3年度（2021年度）研究報告』島根県技術士
会
- 播磨定男 1987『中国地方の板碑』山陽新聞
- 原宏一 1984『野の石』
- 益田市教育委員会 2017『市内石造物調査概報』1
- 益田市教育委員会 2020『益田市内石造物調査概報』2
- 松江石造物研究会（岡崎雄二郎、西尾克己、稲田信、佐伯
純也、木下誠）2014『龍海山三明院佛谷寺に所在する
石造物群について』『伯耆文化研究』第15号 伯耆文化研
究会
- 関野大丞・伊藤徳広 2022『「港町温泉津」の景観と変遷』
における石造物調査ー中間報告ー』『石見銀山遺跡の調査
研究』12 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 関野大丞 2023『中世石造物からみた温泉津』『石見銀山
遺跡テーマ別調査研究報告書5 港町温泉津の景観と変
遷』島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 松尾充晶 2004『多伎町の近世石造物』『米待ストーン研
究』5 米待ストーンミュージアム
- 2006（財）米子市教育文化事業団『吉谷亀尾前遺跡・古
市六反田遺跡』

第1表 山陰地域の木製板橋一覽

名称	所在	時期	材質	形状	寸法	原始形状	原文	文献
吉野宮遺跡の遺物	河内郡吉野	14世紀末	木製(杉)	圓錐形	高さ (cm) 230	高さ (cm) 21	天目蓋・二条御簾	29
出雲西谷林本尊	出雲西谷林本尊	[3]~[4]世紀	埴土(赤褐色)	圓錐形(断面略方)	452.4	16	天目蓋・二条御簾	10
出雲西谷林本尊	出雲西谷林本尊	[3]~[4]世紀	埴土(赤褐色)	圓錐形(断面略方)	284.2	14	天目蓋・二条御簾	
出雲西谷林本尊	出雲西谷林本尊	[3]~[4]世紀	埴土(赤褐色)	圓錐形(断面略方)	262.2	16.4	天目蓋	
出雲西谷林本尊	出雲西谷林本尊	[3]~[4]世紀	埴土(赤褐色)	圓錐形(断面略方)	62.9	6.9	天目蓋・二条御簾	
出雲西谷林本尊	出雲西谷林本尊	[3]~[4]世紀	埴土(赤褐色)	圓錐形(断面略方)	62.9	6.9	天目蓋・二条御簾	

第2表 島根県の石製版碑一覧

[illegible]

第3表 鳥取県の光背形板碑・墓理一覽

[illegible]

圖書文獻

- [illegible]

- 9 鳥羽動物教育委員会 1990『鷹ノ土町の石川内遺跡発掘調査報告書 鷹ノ土山地区・南遺跡部・内堀石垣部』
- 10 鳥羽動物教育委員会 2007『山崎遺跡Ⅱ・Ⅲ部』(p.23)
- 11 鳥羽動物教育委員会・大田市教育委員会 2006『七尾山遺跡石遺物調査報告書 遺跡発掘地区東部考古学』
- 12 鳥羽動物教育委員会・大田市教育委員会 2007『石見郡山遺跡石遺物調査報告書? 遺跡発掘地区の石遺物? 発掘地区東部考古学』
- 13 鳥羽動物教育委員会・大田市教育委員会 2010『石見郡山遺跡石遺物調査報告書 遺跡発掘地区の石遺物? 発掘地区東部考古学』
- 14 鳥羽動物教育委員会・大田市教育委員会 2011『石見郡山遺跡石遺物調査報告書 遺跡発掘地区の石遺物? 発掘地区東部考古学』
- 15 鳥羽動物教育委員会・大田市教育委員会 2011『石見郡山遺跡石遺物調査報告書 遺跡発掘地区の石遺物? 発掘地区東部考古学』
- 16 鳥羽動物教育委員会・大田市教育委員会 2012『石見郡山遺跡石遺物調査報告書 遺跡発掘地区の石遺物? 発掘地区東部考古学』
- 17 鳥羽動物教育委員会・大田市教育委員会 2016『石見郡山遺跡石遺物調査報告書 遺跡発掘地区の石遺物? 発掘地区東部考古学』
- 18 鳥羽動物教育委員会・大田市教育委員会 2017『石見郡山遺跡石遺物調査報告書 遺跡発掘地区の石遺物? 発掘地区東部考古学』
- 19 鳥羽動物教育委員会・大田市教育委員会 2017『石見郡山遺跡石遺物調査報告書 遺跡発掘地区の石遺物? 発掘地区東部考古学』
- 20 田中幸一・原田洋一 2002『石見郡山遺跡石遺物調査報告書 遺跡発掘地区の石遺物? 発掘地区東部考古学』
- 21 鳥羽動物教育委員会 1996『鷹ノ土町の石川内遺跡発掘調査報告書 鷹ノ土山地区・南遺跡部・内堀石垣部』
- 22 鳥羽動物教育委員会 2007『山崎遺跡Ⅱ・Ⅲ部』(p.23)
- 23 鳥羽動物教育委員会 2007『山崎遺跡Ⅱ・Ⅲ部』(p.23)
- 24 鳥羽動物教育委員会 2007『山崎遺跡Ⅱ・Ⅲ部』(p.23)
- 25 鳥羽動物教育委員会 2007『山崎遺跡Ⅱ・Ⅲ部』(p.23)
- 26 鳥羽動物教育委員会 2007『山崎遺跡Ⅱ・Ⅲ部』(p.23)

										報告番号 調査番号	種 別
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24		
円頂 方形基 礎	円頂 方柱基 礎	円頂 方柱基 礎	円頂 方柱基 礎	笠付 方形基 礎	笠付 方形基 礎	笠付 方形基 礎	石 廟（梁か）	笠付 方形基 礎	石 燈籠の 中台		
34	37.5	40.5	34.5	64	50	62.5	(84)	(36)	(70)	全高	
18	19.5	21	18.5	31	26	41	13	26.5	18.5	最大幅	
(右面) 文政十一年 十一月十八日 (左面) 俗名ヲ 殿田淨土 ○太立之	(右面) 文政元庚寅 (正月) 松次妙庵 施主殿田屋 タメ	(右面) 文政七年 十月〇〇日 (正月) 釋元 觀空	(右面) 文化三丙寅 (左面) 正月九日 (正面) 正月九日 源助更 才	判読 できず	(正面) 元禄十二 年士 (正月) 四月九日 黒山淨光 傳士	(正面) 元禄十二 年士 (正月) 四月九日 黒山淨光 傳士				銘 文	
5 二 8 段の 基礎。福光石製、総高は	6 二 段の基礎。福光石製、総高は	7 三 段の基礎。福光石製、総高は	5 五 段の基礎。福光石製、総高は	基 礎を 設け る	基 礎を 設け る	基 礎を 設け る	基 礎を 設け る	基 礎を 設け る	基 礎を 設け る	備 考	
1829	1818	1824	1806	1699	1699	1699				西暦	

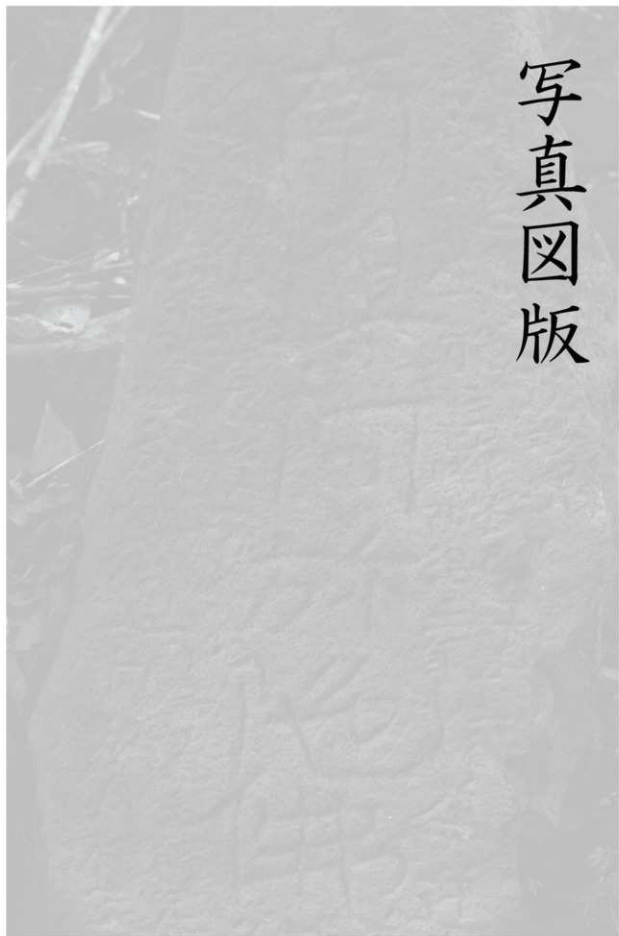
					40		38		37		36		35		34
					組合せ宝篋印塔？類		円頂方柱墓標		円頂方柱墓標		円頂方柱墓標		一石宝篋印塔3基 たは4間		円頂方柱墓標
					32		37		35		37				365
					35		18		18		19				18
					礎		(右面)弘化二巳六月十八日 (正面)釈西正 (左面)俗名豊松 田中為治郎立之 年三十才	(右面)天保九戌 (正面)歌妙信 (左面)歌妙信 ユミ四十二才死	(右面)文政四巳六月廿日 (正面)釋明見 (左面)歌妙信 飯田屋三才次郎立之		(右面)○ (正面)○ (左面)○ 四月十日 (左面)石志道書為善林	(右面)○ (正面)○ (左面)○ 第十三年忌 四月十日 (左面)石志道書為善林		(右面)天保九戌 (正面)釋淨蓮 (左面)俗名亀次 年四十才 豊松父	
					塵櫃C類。白色凝灰岩製		一段の基壇をもち、総高は49cm程度。福光石製		二段の基壇をもち、総高は59cm程度。福光石製		二段の基壇をもち、総高は62cm程度。福光石製		福光石製。相輪部は欠損		二段の基壇をもち、総高は61.5cm程度。福光石製
							1845		1838		1821				1838

第4表 大谷地区定徳寺脇墓地の石造物

11	10	9	7	6	5		3・8・18	2	1	報告番号
						4				調査番号
無縫塔	地蔵	笠付方形基壇	笠付方形基壇	一石宝篋印塔3b類	たは石宝篋印塔3b類	一石五輪塔4b類	組合せ宝篋印塔3類 B～E部01、基礎C類	地蔵	六字名号板碑	種別
(63)	(30)	62.5	64	(62)	(35)	(255)		(57)	114	全高
28	(23)	32	37	26	13	14	36	27	36	最大幅
	(正面) ○美雲女○ ○保○西○月十一日		(正面) ○版○流○ ○月八日		(正面) ○九月二日	(正面) ○九月二日	(正面) 元禄元辰 十二月八日		別記	銘文
白色凝灰岩製	製部より上は欠損。福光石	花日福を施す。下部墓の中央上段に横に請に	花日福を施す。下部墓の中央上段に横に請に	花日福を施す。下部墓の中央上段に横に請に	花日福を施す。下部墓の中央上段に横に請に	花日福を施す。下部墓の中央上段に横に請に	花日福を施す。下部墓の中央上段に横に請に	花日福を施す。下部墓の中央上段に横に請に	花日福を施す。下部墓の中央上段に横に請に	備考
	1717か					1688			1557	西暦

23	22	21	20	19	17	16	15	14	13	12
石燈籠の竿	無縫塔	組合せ宝篋印塔4類	一石五輪塔4b類	石廟（屋根）	一石五輪塔3類	円頂方柱基壇	円頂方形基壇	一石五輪塔3a類	たは石宝篋印塔3b類	一石五輪塔3b類
(70)	(56)	(40)	47	76	(17)	31	50.5	66	(64)	(17)
18.5	29	(15)	12	43	19	18	21.5	20	25	18
					道	(正面) 寛仁○秋○	(正面) 享保十七年十月十四日 六明寺	(正面) 天正二十年四月八日 孝子敬白	(正面) ○三十九日	(正面) ○三十九日
文八袋角下形で福光石製。納上あじに	は正増立している状態。下部	類宝珠。下には流線を描すC	福光石製	1枚材構成。石を設ける。5cm。合。推。定。根。幅。に。は。3	敷地。の。み。残。存。白色凝灰岩	石。正。面。は。削。り。込。み。あり。己。巳。	花。付。き。台。座。と。福。光。石。を。併。い	白色凝灰岩製	敷。に。請。花。を。施。す。福。光。石	敷。の。み。残。存。白色凝灰岩
						1749	1732	1592		

写真図版





阿弥陀三尊種字六字名号自然石板碑



左側面の加工痕跡



阿弥陀三尊種字部分



「弘治三年」銘部分

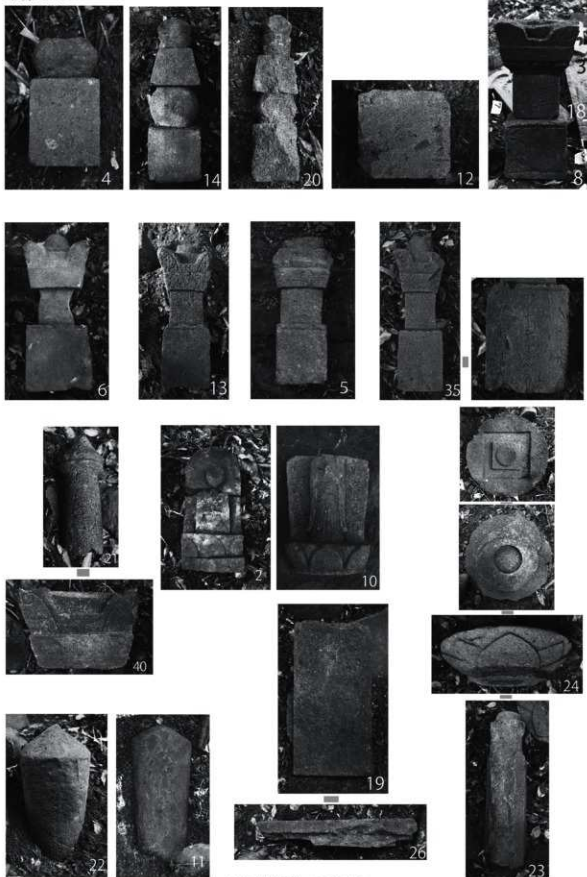


六字名号部分



寄進者「為建立禅定門・阿〇〇禅定尼」部分

阿弥陀三尊種字六字名号自然石板碑（部分）



定徳寺脇墓地の石造物1



定徳寺脇墓地の石造物2

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちようさほうこくしょ				
書 名	石見銀山遺跡石造物調査報告書				
副 書 名	大谷地区 定徳寺脇墓地				
巻 次					
シ リ ーズ 名	石見銀山遺跡石造物調査報告書				
シリーズ番号	23				
編 執 筆 者	岩橋孝典				
編 集 機 関	島根県教育委員会・大田市教育委員会				
所 在 地	〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 TEL0852-22-5642 〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 TEL0854-82-1600				
発 行 機 関	島根県教育委員会				
発 行 年 月	2025年8月				
名 称	所在地	コード	北緯	東経	調査年月日
		市町村			
定徳寺脇墓地	島根県大田市大森町	33205	35度5分54秒	132度25分35秒	2024年11月 ～ 2024年12月
調 査 原 因	石見銀山遺跡総合調査				
名 称	所在地	主な時代	石 造 物		
定徳寺脇墓地	大田市大森町	戦国時代 ～江戸時代	宝篋印塔、五輪塔、無縫塔、石燈籠、石廟、板碑、墓標など約35基の石造物からなる墓群。造立の起点となる六字名号板碑は弘治3年（1557）の造立で石見銀山遺跡内では最古の紀年銘を持つ石物である。墓塔では天正20年（1592）銘の一石五輪塔から造立が始まり、弘化2年（1845）の円頂方柱墓標までが確認される。 18世紀後半は造墓活動の空白期が認められ、19世紀代は「飯田屋」墓地として機能したものと考えられる。		

石見銀山遺跡石造物調査報告書23

—大谷地区・定徳寺脇墓地—

令和7(2025)年7月

編 集 島根県教育委員会／大田市教育委員会
松江市殿町1番地／大田市大田町大田口1111番地

発 行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

U R L http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/

印 刷 有限会社 松陽印刷所
